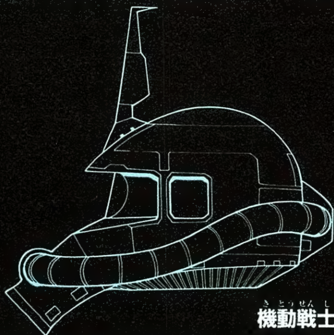
MSV

MOBILESUIT VARIATION

TECHNICAL HANDBOOK

ZAKU VARIATION

●MS-05 ●MS-06 ●MSN-01 ●MSN-02



機動戦士ガンダム

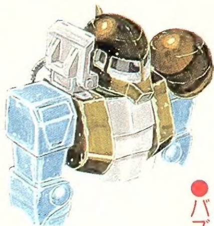
モビルスーツバリエーション① ザク編

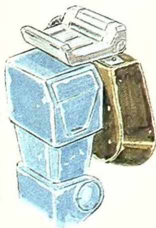
MS-05
ザク



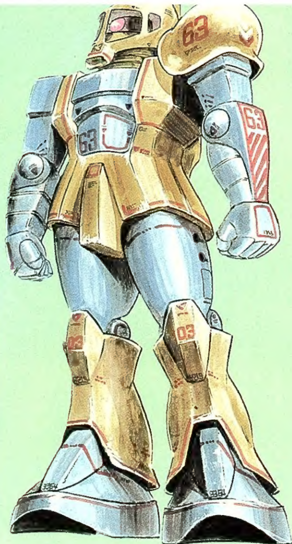
MS-05
ザク

ジオン軍のモビルスーツ機動部隊は、MS－05の量産と、機動軍の設立により、はじめて実戦部隊が編成された。

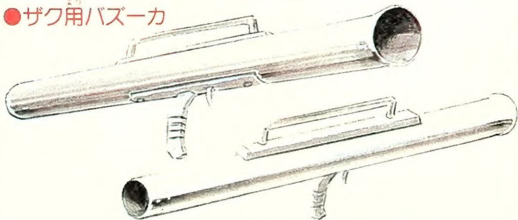




●バズーカ用ラック



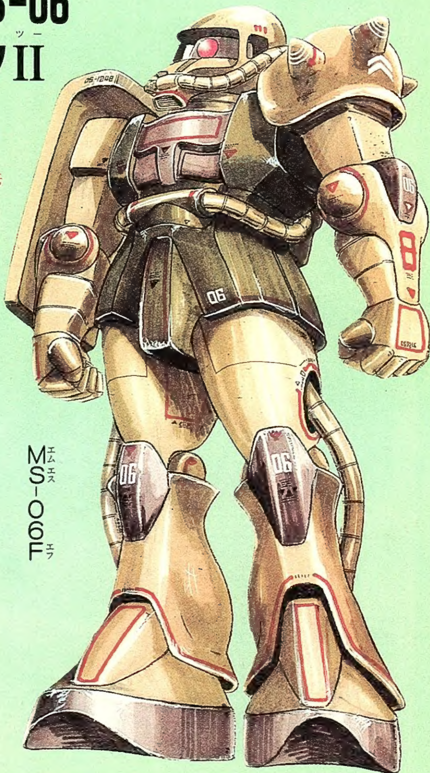
●ザク用バズーカ



MS-06 ザクII

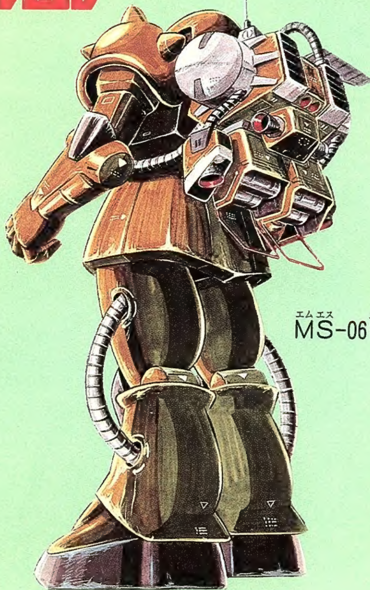
●Fタイプ

MS—06ザクIIは、ジオン軍のすべてのモビルスーツの基本であり、また、ザクIIをベースとする数多くのバリエーションをもつ。生産機数がもっとも多いモビルスーツでもある。



MS-06F

●機雷散布ポッド搭載機



大戦初期から中期にかけて，Ｆタイプのザク II に機雷散布ポッドとバーニヤを一体化したランドセルを搭載したものが，宇宙空間への機雷敷設に活躍した。とくに，地球からルナツーへの航路と，暗礁空域において，地球連邦軍の宇宙艦艇は，多大な損害をうけた。

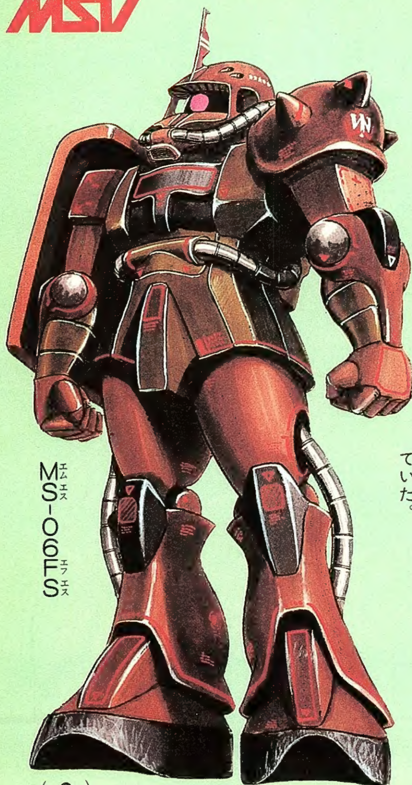
カスタムタイプのザクII



●ドズル＝ザビ中将機

ジオン軍では、高級将校がカスタムタイプのモビルスーツをもつことをみとめられていた。そのなかで有名なのが、特製の大型ヒートホークを装備した、ドズル中将のF型カスタムである。戦場視察の名目で、中将自身がこのザクにより実戦参加したことは、よく知られている。

MS-06F



●ガルマ＝ザビ大佐機

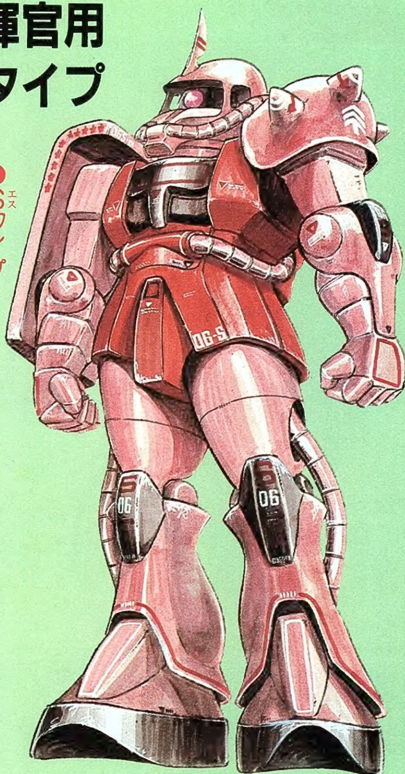
ガルマ大佐のザクは、チューンアップされた以外は、特別の改造をうけていないFS型である。F型に四十ミリ機関砲を四門搭載したFS型は、F型のマイナーチェンジ版であり、F型の生産ラインのなかで製造されていた。

MS-06FS

指揮官用Sタイプ

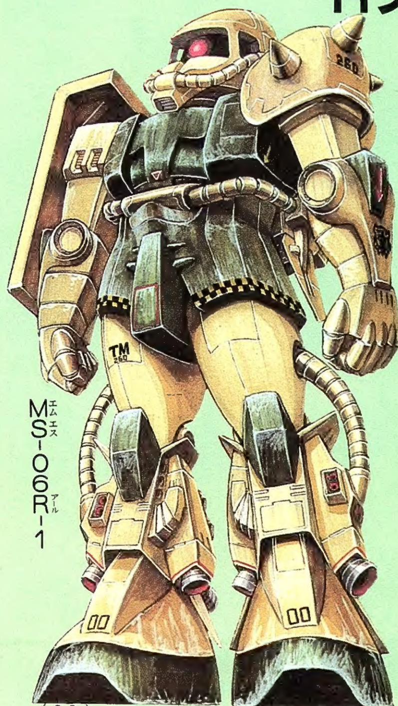
●Sタイプ

中隊長クラスのすぐれたパイロットの要望にこたえ、F型の推進エンジン出力を三十パーセント向上させたものを、Sタイプとよんでいる。Sタイプは、約百機生産された。〝赤い彗星〟こと、シャア＝アズナブル少佐の愛機も、このSタイプであった。



MS-06S シャア＝アズナブル少佐機

高機動型(こうきどうがた) R(アール)タイプ



MS(エムエス)-06R(アール)-1

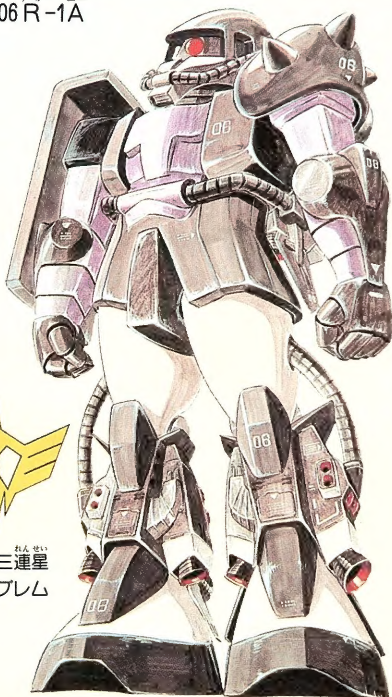
●R(アール)タイプのバリエーション

それまでのC(シー)タイプやF(エフ)タイプにかわり、開発(かいはつ)されたR(アール)タイプは、バーニヤを強化(きょうか)した高機(こうき)動型(どうがた)である。R(アール)タイプには、燃(ね)料(りょう)タンク内蔵式(ないぞうしき)のR(アール)—I、カートリッジ式(しき)のR(アール)—IA(エー)、そして燃料積載量(ねんりょうせきさいりょう)がさらに増加(ぞうか)されたR(アール)—2がある。

黒い三連星

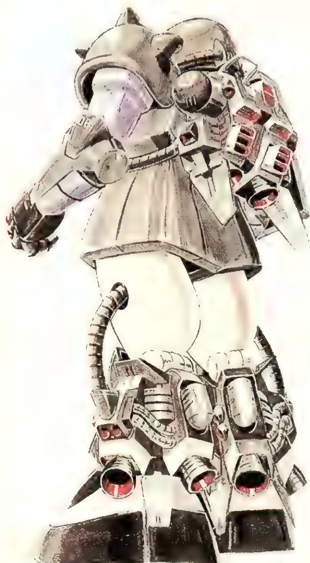
MS-06R-1A

Rタイプのエースパイロット





黒い三連星
エンブレム



●R-1Aタイプ

R―1Aは、R―1の補助燃料タンクをカートリッジ化したもので、戦場での燃料補給がかんたんなことから、多くのエースパイロットに愛用された。そのため、生産機数が少ないわりには、大きな戦果をあげている。

●黒い三連星

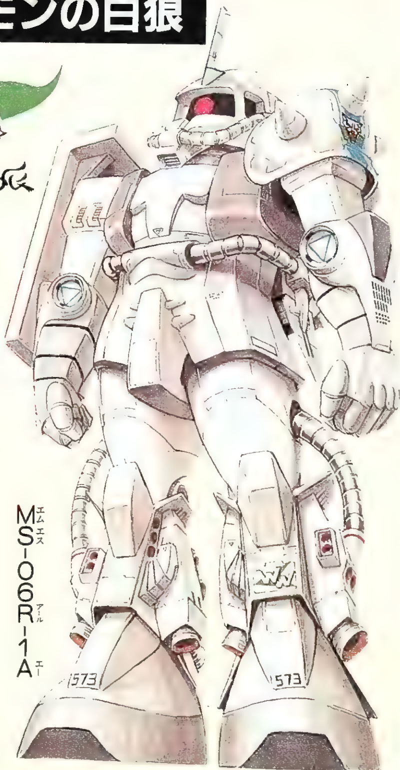
Rタイプを駆って、もっとも勇名をはせたのが、キシリア少将指揮下の突撃機動軍に所属する、〝黒い三連星〟とよばれるグループである。ガイア少尉を中心とする三名編成の特務小隊で、三機のモビルスーツによる奇襲戦法〝ジェットストリーム＝アタック〟で、数々の戦功をあげている。彼らの使用したR―1Aタイプは、月面のグラナダ基地で生産されており、ほかのR―1Aと多少、細部がことなっている。

ソロモンの白狼



●シン＝マツナガ大尉

接近戦がとくいであったシン＝マツナガ大尉は、ソロモン方面で活躍していた。ドズル中将の戦場視察のおりには、かならず、マツナガ大尉の白いR—1Aが護衛をつとめた。



MS-06R-1A

●モビルスーツバリエーション

MSV

MS-06R-2

真紅の稲妻





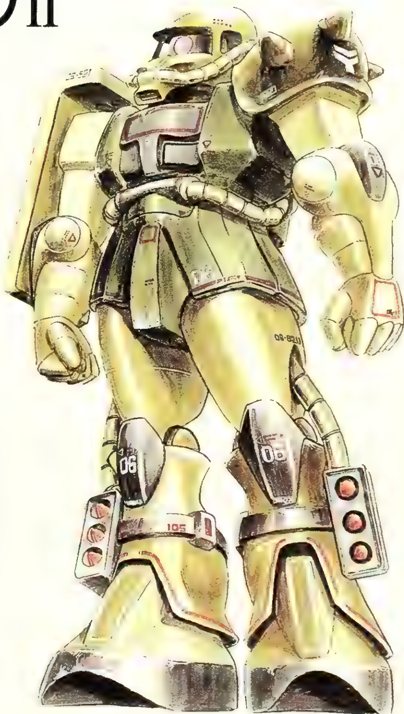
●ジョニー＝ライデン少佐

ジョニー＝ライデン少佐は、数多くのゲリラ戦にその戦果をあげている。彼の乗機は、四機しか生産されなかったR―2タイプのうちの一機である。

陸戦型ザクII

●Jタイプ

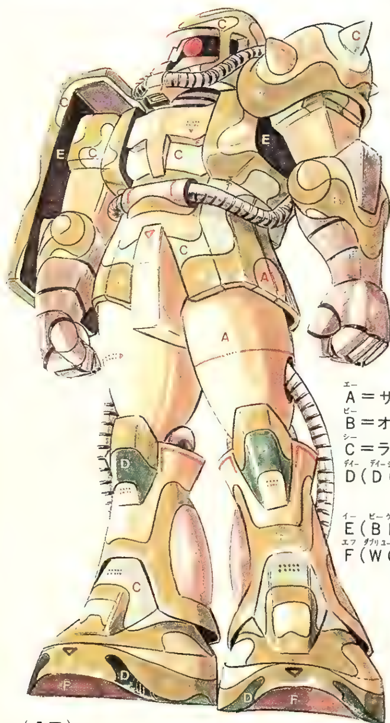
陸戦型のザクであるJタイプは、Fタイプから地上戦に必要なものを残し、不要なシステムをとりはずして軽量化がはかられたものだ。陸戦用モビルスーツの基本となったJタイプは、グフとならんで、大戦初期の地球侵攻作戦で活躍した。



MS-06J

●Jタイプの迷彩塗装

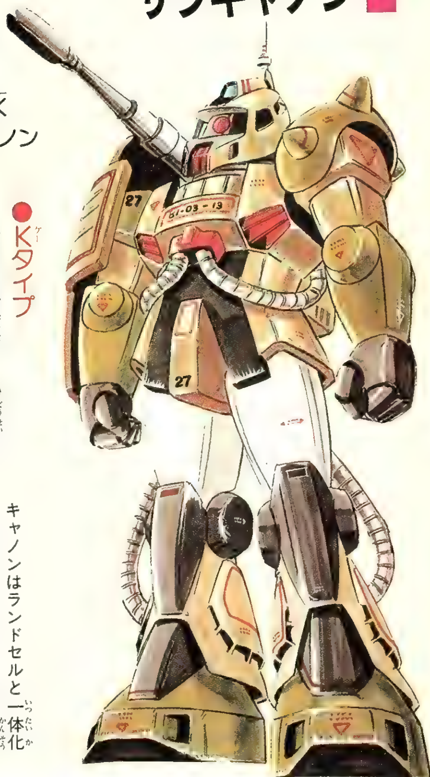
モビルスーツの迷彩塗装は、陸戦型に多くみられる。パターンは作戦地域によってことなっており、一定のものはない。



A＝サンド
B＝オリーブ
C＝ライム
D（DG）＝ダークグリーン
E（BK）＝ブラック
F（WG）＝ワームグレー

ザクキャノン

MS-06K
ザクキャノン



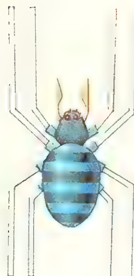
●Kタイプ

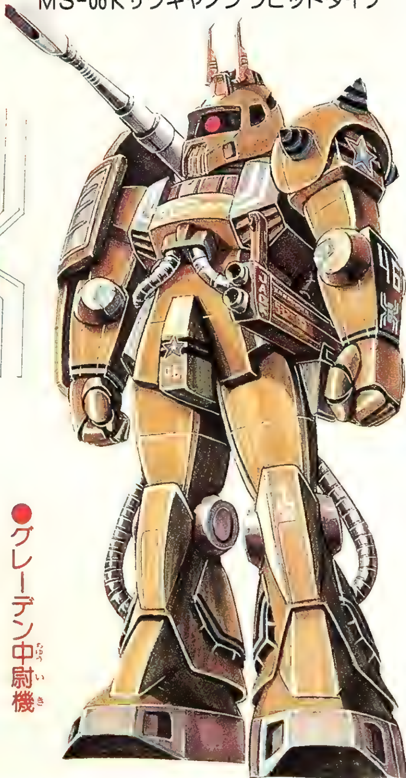
地上での作戦時に、機動性の高い対空防御の方法として、北米キャリフォルニアベースで開発された。右肩の百八十ミリキャノンはランドセルと一体化されており、ランドセルの換装により、J型ザクと同様に使用できた。ただし、重量バランスに問題があった。

●モビルスーツバリエーション

MSV

MS-06Kザクキャノン ラビットタイプ





●グレーデン中尉機

グレーデン中尉が使用したKタイプは、近距離通信アンテナが二本ある、ラビットタイプとよばれるものだった。

ザクデザートタイプ

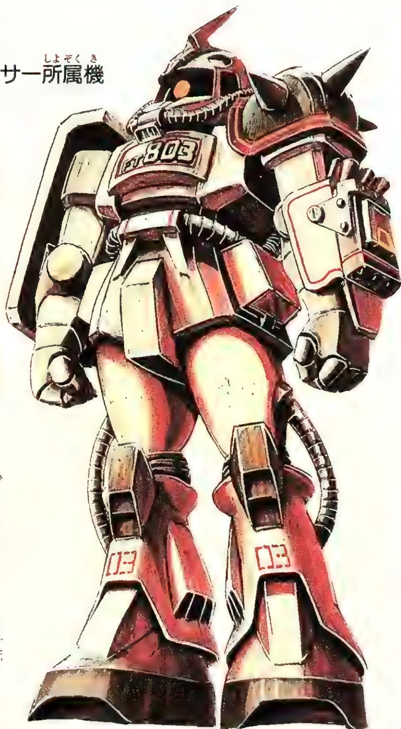
MS-06D
ザクデザートタイプ



●Dタイプ

地球侵攻軍の強い要請により開発されたのが、この熱帯・砂漠戦用のDタイプであった。Jタイプを基本に、軽量化と出力増加がはかられている。地上での冷却効率を考えて、ランドセルには大型空冷装置がつき、武装・装甲も強化されている。

MS-06D
ピンクパンサー所属機



●ピンクパンサー部隊

アフリカ・中東戦線の実戦部隊中、ピンクパンサー部隊にははやくからDタイプのザクが配備されていた。この部隊は、サハラ砂漠からジブラルタル海峡までを制圧し、ジオン軍のヨーロッパ侵攻の足がかりをつくったことで知られている。

MS-06Dカラカル所属機



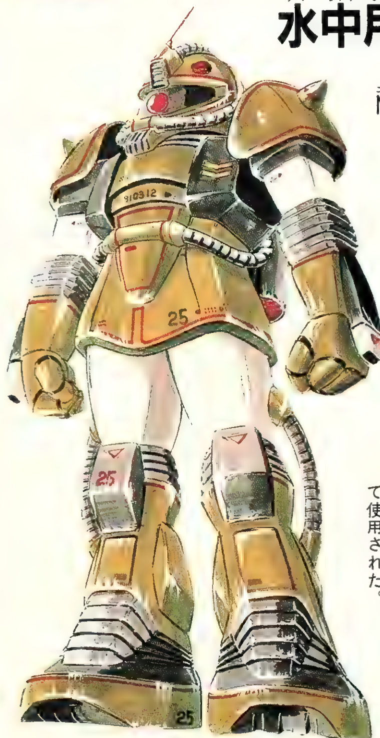


●カラカル部隊

カラカル部隊は、リビア砂漠からスエズ運河西岸を作戦地域とする、小隊編成の特務部隊である。ゲリラ戦法をとくいとするこの部隊は、北アフリカ戦線において反攻をこころみる連邦軍に、いく度となく奇襲攻撃をかけていった。

Mタイプ水中用ザク

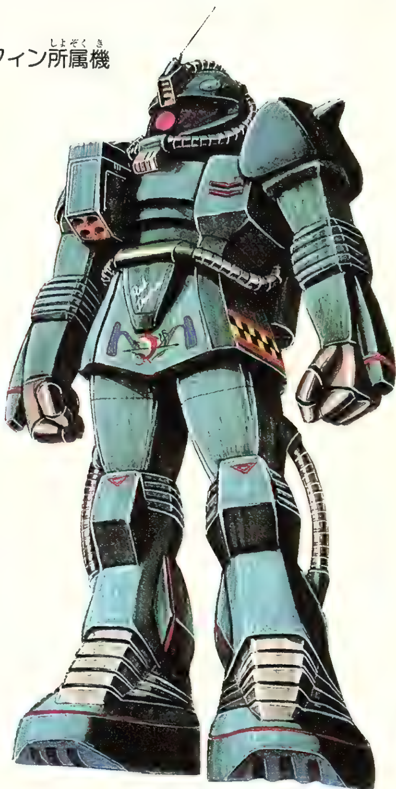
MS-06M



●Mタイプ

水中用モビルスーツの必要性を感じたジオン軍では、ザクに防水機構と水流エンジンを装備する計画がたてられた。だが、このMタイプの開発は難航し、中止されてしまった。試作されたMタイプは、ほかの水陸両用モビルスーツ開発の試験機として使用された。

MS-06M レッドドルフィン所属機

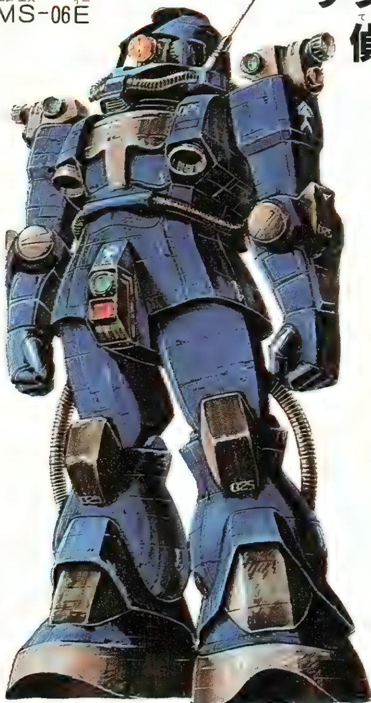


●レッドドルフィン部隊

大戦末期、南太平洋を作戦海域とする潜水艦隊〝レッドドルフィン〟に、主力のMSM-07ズゴックの補助として、Mタイプのザクが配備された。このMタイプは、地中海沿岸への上陸作戦に参加しているが、どの程度の戦果をあげえたか、記録はない。

Eタイプ ザク強行偵察型

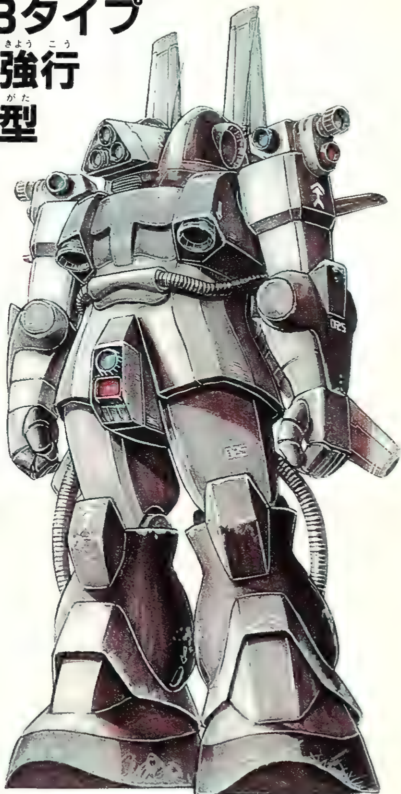
MS-06E



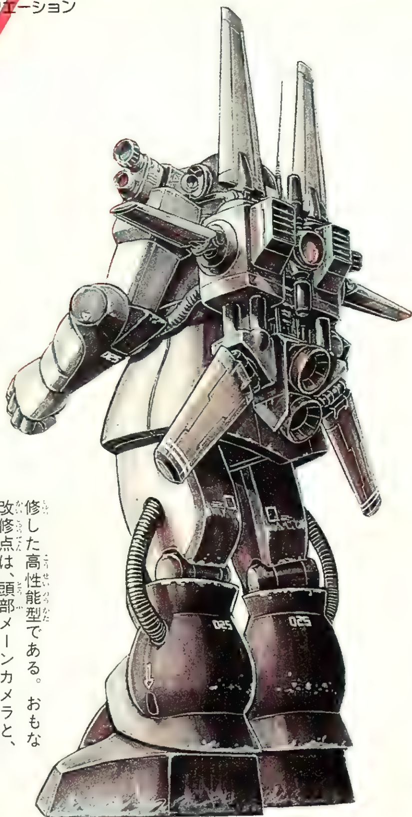
●Eタイプ

ミノフスキー粒子干渉下での戦略偵察を目的とするEタイプは、CタイプやFタイプを改造し、偵察カメラや緊急脱出用ロケットを増設している。生産機数は約百で、ソロモンや、ア＝バオア＝クーで改造がおこなわれた。

E-3タイプ
ザク強行偵察型



MS-06E-3

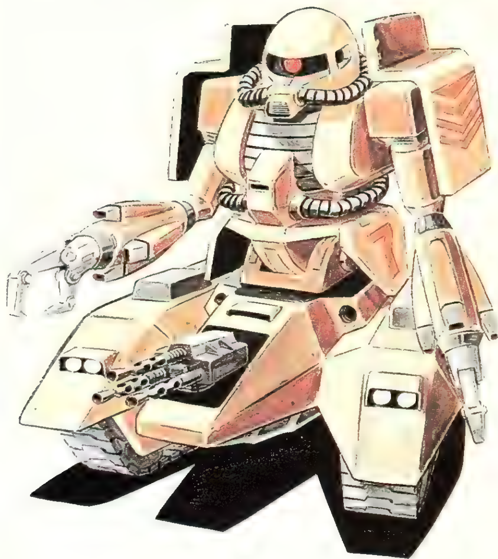


●E-3タイプ

E-3タイプは、それまで生産されたEタイプを、さらに改修した高性能型である。おもな改修点は、頭部メーンカメラと、背部複合探知システムの強化である。この大型探知システムの動きから、前線兵士のあいだでは〝フリッパー〟とよばれた。

V(ブイ)タイプ ザクタンク

MS(エムエス)-06V(ブイ)ザクタンク



MS-06V-6ザクタンク



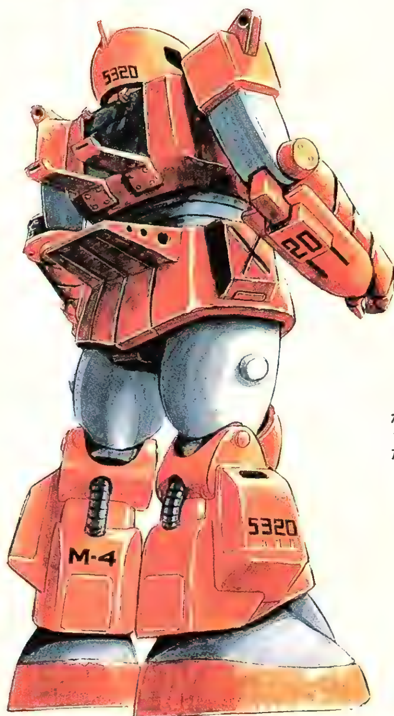
●ザクタンク

脚部を失ったザクと，マゼラベースを組み合わせたのがザクタンクである。アフリカ戦線の工作部隊によって，廃物利用の作業機として製作されたのがはじまりであった。のちに各地でつくられたVタイプのなかには，再武装をほどこされ，補助的兵器として使用されたものもある。

一般作業型ザク

MS-06W



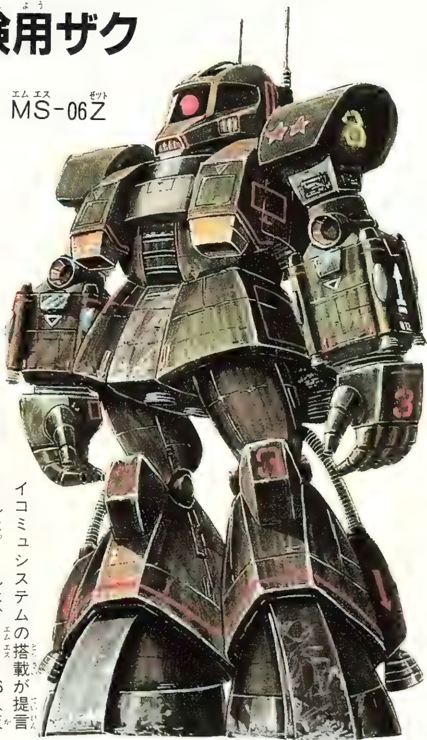


●一般作業型ザク

一般作業型のザクは、破壊されたモビルスーツの部品で、再使用できるものを組み合わせてつくられている。正式な型式ナンバーはないが、一般にWタイプとよばれていた。戦闘能力はなく、一般作業にしか使用できなかった。

サイコミュシステム試験用ザク

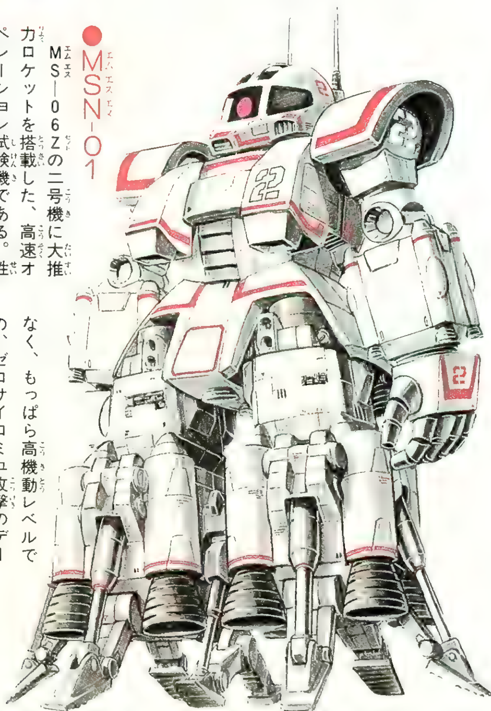
MS-06Z



●Zタイプ

ニュータイプのパイロット出現により、モビルスーツへのサイコミュシステムの搭載が提言された。これは、MS-16（仮称）として、開発がはじめられたが、その前段階として、Fタイプのザクを改造したZタイプで、各種実験がおこなわれた。

MSN-01



●MSN-01

MS—06Zの二号機に大推力ロケットを搭載した、高速オペレーション試験機である。性能的には実用機となるものではなく、もっぱら高機動レベルでの、ゼロサイコミュ攻撃のデータ収集にのみ使用された。

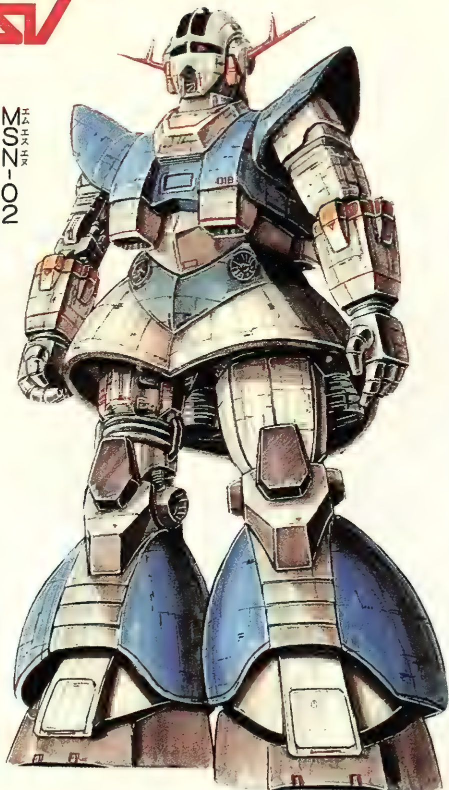
MSN-02
ジオング



●MSN-02ジオング

究極のモビルスーツとして開発されたジオングは，ニュータイプむけのモビルスーツであった。有線誘導のビーム兵器を搭載し，サイコミュシステムでコントロールする。完成すると，全高38メートルにもおよぶ巨大なモビルスーツとなるはずであった。

MSN-02
ジオング（パーフェクトジオング）



MSV
エンブレムコレクション
Emblem Collection



シン=マツナガ大尉
(MS-06R-1A)

〝ソロモンの白狼〟として勇名をはせた，シン=マツナガ大尉のパーソナルエンブレム。ザクの右肩シールドにかかれていた，この白いおおかみは，宇宙空間でもよく識別できたという。

ジョニー＝ライデン少佐（MS-06R-2）



〝真紅の稲妻〟こと，ジョニー＝ライデン少佐のパーソナルエンブレム。ザクの左ひじの装甲にかかれていたため，あまりめだたず，しばしばシャア＝アズナブル少佐のザクと誤認された。ライデン少佐のザクの塗装とエンブレムは，R―2のまえに使用したFタイプから，このパターンである。

カーミック＝ロム大尉（MS-06D）



この〝アラビアン〟は、中東西部に侵攻した、カーミック＝ロム大尉のパーソナルエンブレムであった。のちに、遊撃隊〝スコルピオ〟が編成されてからは、部隊マーキングとして使用された。〝スコルピオ〟には、Dタイプのザクのほか、グフなども配備されていた。

（38）

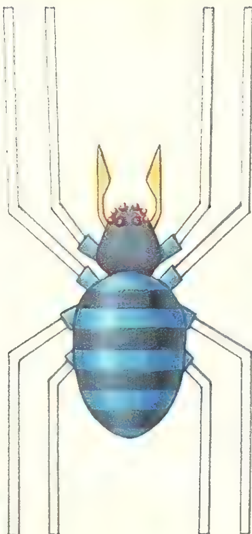
ザクレディ

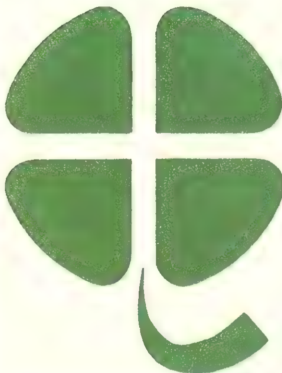


南ヨーロッパを中心に展開された、第三次掃討作戦で活躍した〝ブリッツ〟中隊で使用されたマーキングである。記録によれば、中隊全体で使用されたわけではなく、個人、あるいは小隊ぐらいの規模で使用されたものらしい。

グレーデン中尉

北アメリカ戦線に配属された，グレーデン中尉のマーキング。乗機はＭＳ―06Ｋ。





カラカル部隊

アフリカ戦線にあった〝カラカル〟部隊のマーキング。ＭＳ―06Ｄの左腕アーマーにかかれていた。



黒い三連星

本来は，突撃機動軍のマークだが"黒い三連星"以外のモビルスーツには使われなかったようだ。



MS-06R-1

グラナダの第７師団のＲ－１タイプのザクにみられたマーキング。



アルフレディーノ＝ラム少尉(しょうい)

北(きた)アフリカ戦線(せんせん)で，グレーデン中尉(ちゅうい)と同様(どうよう)，MS(エムエス)―06K(ケー)を乗機(じょうき)としたラム少尉(しょうい)のパーソナルエンブレム。



MS(エムエス)-06D(ディー)

中東南部(ちゅうとうなんぶ)で作戦(さくせん)にたずさわった部隊(ぶたい)でみられたマーキング。戦後(せんご)の調査(ちょうさ)でも，くわしいことはわかっていない。

MSV Emblem Collection



キリー＝ギャレット少佐（MS-06J）

地球攻撃軍に所属する女性パイロットのマーキング。北米キャリフォルニアベースで確認されている。



MS-06R-1A

ギレン総帥直属の，ジオン公国防衛部隊で使用されたマーキング。ア＝バオア＝クーで，終戦直前に確認されている。



MS-06R-1

ソロモンを基地とする特殊攻撃隊にみられたマーキング。Eタイプにも，同一のものがみられた。

強襲！黒い三連星



●解説は、一六四ページにあります。



●ジェットストリーム＝アタック

黒い三連星MS-06R-1A



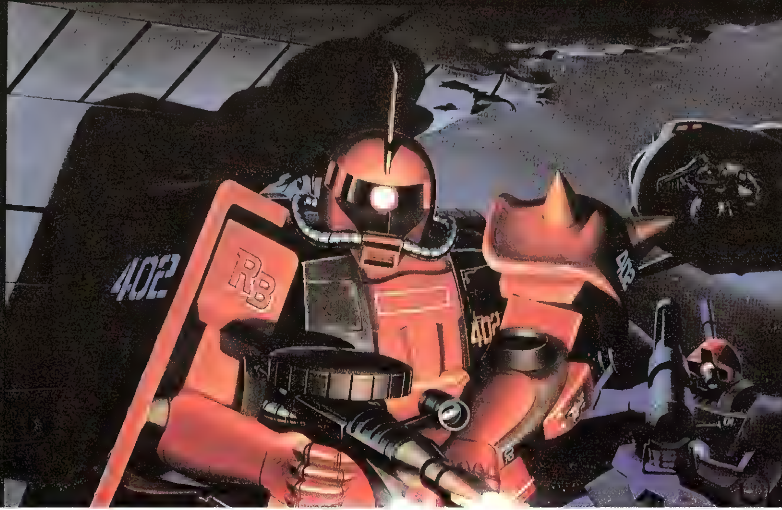
●解説は、一六二ページにあります。

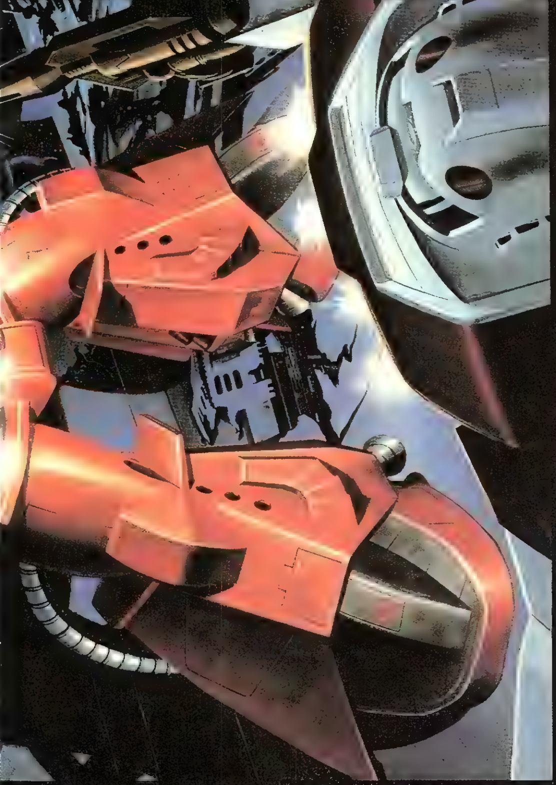
●テキサスコロニーにて

シン＝マツナガ大尉 MS-06R-1A



●解説は、一六〇ページにあります。


●モビルスーツ イン アクション
MSV
●暗礁空域での戦闘
ジョニー＝ライテン少佐 MS-06R-2
402
RB
402



●解説は、一五八ページにあります。

北アメリカ戦線　MS-06K



●解説は、一四八ページにあります。

MSV

キャリフォルニアベース防空戦　MS-06K



●解説は、一五〇ページにあります。

熱砂のバトルフィールド　MS-06D



●解説は、一四六ページにあります。

MSV 北アフリカ戦線のザクタンク MS-06V

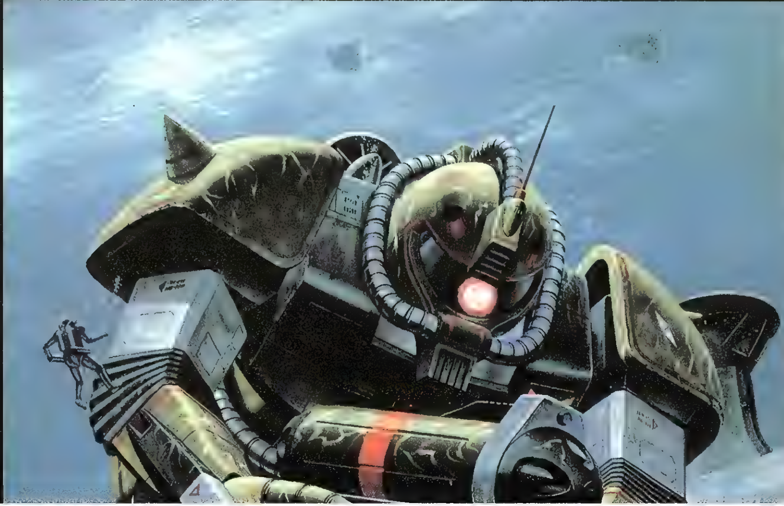


●解説は、一五六ページにあります。

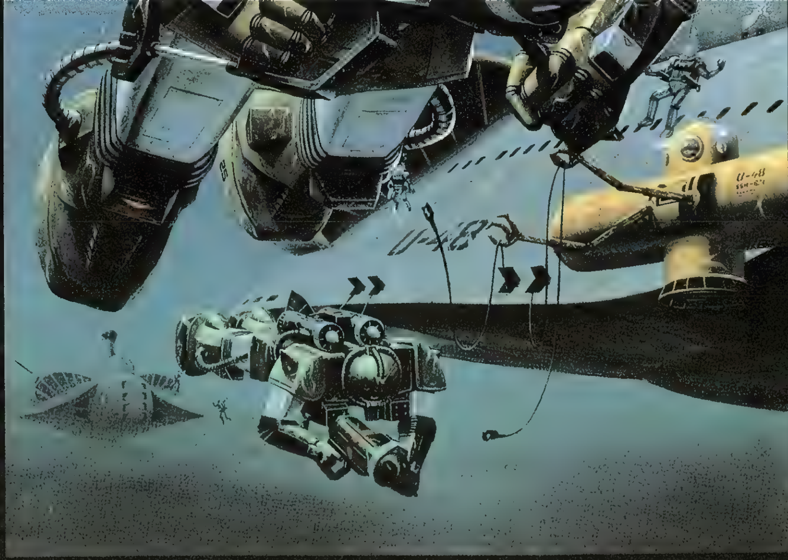
●モビルスーツ イン アクション

MSV

水中性能試験 MS-06M



●解説は、一五四ページにあります。




●モビルスーツ インアクション
MSV
強行偵察
MS-06E

●解説は、一五二ページにあります。



ZAKU VARIATION
3 Dimension Models

ザク バリエーション スリーディメンション モデルズ



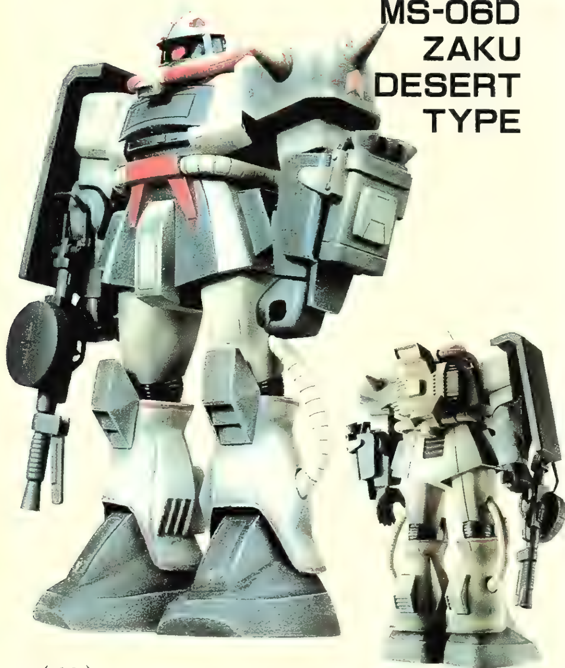
MS-05A
ZAKU

●プラモ製作
小沢勝三
小田雅弘
川口克己
下田　一
高橋昌也
渡辺　誠
大河原邦男


MS-06K
ZAKU
CANNON



ZAKU VARIATION
3 Dimension Models



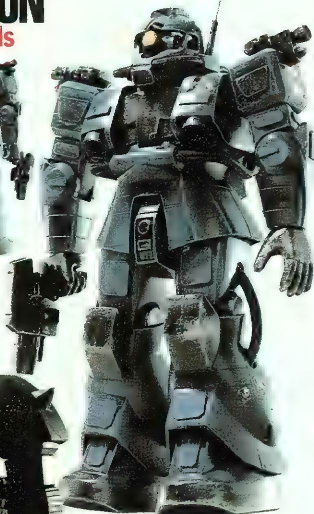
MS-06D
ZAKU
DESERT
TYPE


MS-06V
&V-6
ZAKUTANK

ZAKU VARIATION
3 Dimension Models

MS-06E ZAKU RECONNAIS-SANCE TYPE







MS-06M ZAKU MARINE TYPE



MS-06R SERIES



R-1A TYPE

ZAKU VARIATION
3 Dimension Models

R-2 TYPE





ZAKU VARIATION
3 Dimension Models





MS-06F



MS-06J





MOBILESUIT VARIATION

TECHNICAL HANDBOOK

もくじ

ジオン軍モビルスーツ開発史——68・136

ザクファミリー タイプ別オールカタログ——74

ジオン公国独立戦争史——142

モビルスーツ イン アクション——44・146

エンブレムコレクション——36

ザクバリエーション スリーディメンション モデルズ——58

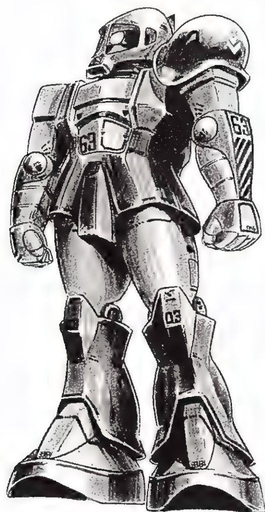
MS-06R-1A パイロット用マニュアル——167

ジオン軍モビルスーツ開発史(1)

今次大戦においてジオン公国が、国力においてまさる連邦軍と、ほぼ互角に戦うことができたのは、モビルスーツの存在があったればこそである。とくに大戦初期には、モビルスーツ機動部隊の活躍が、ジオン軍に一方的勝利をもたらした。

ミノフスキー粒子の発見は、レーダーなどの電波機器の使用を不可能にした。これは、二十世紀後半に完成された兵器体系や、戦略・戦術理論を、根本的にくつがえすものであった。

そこで、ジオン軍では、ミノフスキー粒子干渉下での有視界戦闘を目的とする兵器の開発に着手した。数々の設計をつみかさね、構想五年にして、モビルスーツMS－01が完成。その後七年にして、MS－05ザクが実戦配備された。



ジオン軍モビルスーツ部隊編成の変化

●公国軍の誕生

宇宙世紀五八年、ジオン＝ズム＝ダイクンにより、サイド3共和国宣言がおこなわれ、同時に国防隊が創設された。その四年後、実権をにぎったデギン＝ソド＝ザビにより、国防隊は異例のはやさで国軍へ昇格した。

宇宙世紀七六年五月、初の実戦用モビルスーツMS―05ザクの量産化にしたがい、キシリア＝ザビ大佐（当時）の指揮になる実験的モビルスーツ部隊、教導機動大隊が編成された。この大隊は、モビルスーツによる基本的な戦法を確立したほか、今次大戦で名をあげた多くのエースパイロットを養成したことで知られている。当時の大隊名簿には、シャア＝アズナブルや、のちに〃黒い三連星〃の名をはせるガイア、オルテガ、マッシュなどの名がみえる。

教導機動大隊

大隊本部
- 教導機動大隊
  - 支援戦隊
  - モビルスーツ中隊
    - 対艦小隊
    - モビルスーツ小隊

●モビルスーツ小隊は，MS―05ザク3機よりなる。(105ミリマシンガン装備。)
●対艦小隊は，MS―05ザク3機よりなる。(280ミリ核弾頭バズーカ装備。)
●支援戦隊は，チベタイプ1隻，パプアタイプ2隻よりなる。
●モビルスーツ小隊2隊，対艦小隊1隊で，モビルスーツ中隊となる。
●大隊本部は，旗艦としてチベタイプ1。

●二つにわかれたジオン軍

宇宙世紀七八年十月、宇宙艦艇を国軍の主力とするドズル＝ザビ少将（当時）と、モビルスーツこそ主要兵器と考えるキシリア＝ザビ大佐（当時）がするどく対立。いずれも自説がとおらなければ、軍籍をはなれるとまでいいだした。これに対してギレン＝ザビ総帥は、妥協案として、ジオン軍を二分することにした。ドズルは中将となり、宇宙攻撃軍を指揮し、キシリアは少将となり、突撃機動軍を指揮することとなった。それぞれ昇進し、みずからの軍において、その信じる戦術論を実践できるようになったのである。のちに、ガルマ＝ザビ大佐を司令官とする地球攻撃軍が新編成され、事実上、キシリア少将指揮下にくわわった。

大戦初期のジオン軍の編成

機動師団（艦隊）
- 師団本部
- モビルスーツ大隊
- 衛生小隊
- 通信小隊
- 特務小隊
- 輸送中隊

●宇宙攻撃軍は，モビルスーツ大隊が1隊のみで，かわりに，宇宙戦艦がふやされている。

●衛生小隊は，パプアタイプ1隻，非武装ザク3機よりなる。
●通信小隊も，上記におなじ編成。
●特務小隊は，ムサイタイプ1隻，ザク3機よりなる。
●輸送中隊は，衛生小隊と同編成の輸送小隊3隊よりなる。

●開戦

宇宙世紀七九年一月、ジオン公国は地球連邦に対し、独立戦争をいどんだ。宣戦布告と同時にジオン軍は、サイド1、2、4を制圧し、コロニー自体を地球に落下させる〝ブリティッシュ作戦〟を開始した。世にいう〝一週間戦争〟である。

〝ブリティッシュ作戦〟は、みごと功を奏し、士気高まるジオン軍は、その一か月後、サイド5（ルウム）に駐留する連邦軍のレビル艦隊と、史上最大の宇宙艦隊戦に突入することとなる。のちに、〝ルウム戦役〟とよばれる戦闘である。

この時点でのジオン軍のモビルスーツは、MS－05ザク（A、Bの二タイプ）と、MS－06ザクII（A、C、Fの三タイプ）であった。主力はCタイプで、すでにMS－05は旧式化しつつあったし、Fタイプの生産数は、さほど多くなかった。ジオン軍は、一週間戦争後、制圧したコロニーの工業ブロックで、モビルスーツをふくむ全兵器の生産を開始、同時に本国では、新型モビルスーツの開発に着手していた。

●ザクの活躍

大戦初期におけるザクの活躍は、目をみはるものがあった。ザク一個小隊の戦力は、巡洋艦一隻をしのぎ、作戦目的にあわせて武装をかえられるなど、あらたな戦略・戦術の可能性を考えさせられるものであった。その威力をもって〝一週間戦争〟はいうにおよばず、〝ルウム戦役〟においてもレビル艦隊に勝利。指揮官レビルを捕虜にするという大戦果をあげたのである。

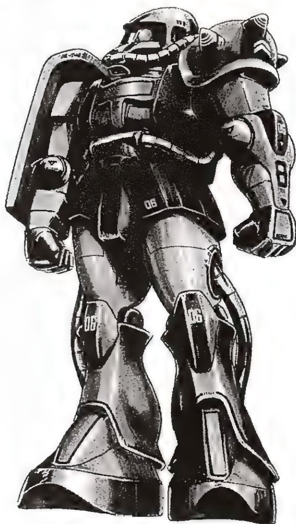
また、ザクの特長として、それまでの

通常兵器では考えられなかった、一般作業能力があげられる。通称〝コロニー落とし〟といわれるブリティッシュ作戦が成功したのも、この作業能力がものをいったのである。もっとも、コロニーの減速作業に忙殺されるザクがねらい撃たれることがあり、長所が、ぎゃくに命とりになることもあった。

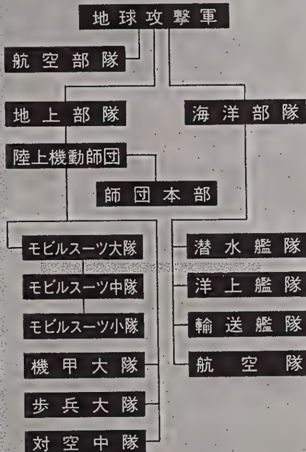
●ジオン軍の地球侵攻

〝ルウム戦役〟により、ジオン軍、連邦軍ともに、宇宙空間での大規模な戦闘が不可能なほど、戦力を消耗していた。その後、一月三十一日に、核兵器使用禁止などをうたった南極条約がむすばれたこともあり、すくなくとも、宇宙空間での戦闘は膠着状態におちいった。

宇宙世紀七九年三月一日、戦局を打開すべく、ジオン軍の地球侵攻作戦が開始された。この作戦には、開始一か月まえ







に編成された地球攻撃軍があたった。地球攻撃軍は、突撃機動軍第一機動歩兵師団を基幹とし、急ぎ、改編、増強されたものであった。軍としての規模は大きいものではなく、地上で完全制圧できた地域もかぎられていた。

主戦力は、もちろんモビルスーツであり、MS－06Fが主力であったが、配備数はさして多くなく、戦闘車両、航空機などで、その不備をおぎなっていた。

ザクファミリータイプ別オールカタログ

ザクは、今次大戦における、ジオン軍の主力モビルスーツである。ザクは、MS−05とMS−06にわけられ、正確には、MS−05がザク、MS−06がザクⅡである。しかし、生産機数が多いことから、06タイプをザクとよび、05を旧型ザクと区別する人も多い。

●MS−05ザク

MS−05ザクは、はじめて実戦にたえうるモビルスーツとして製作されたMS−04から、むだな部分をとりのぞいていくことによって完成した。バリエーションは、初期生産のA型と、後期生産のB型がある。このMS−05の登場によって、モビルスーツへの関心が高まり、新型の開発がはやまっている。

●Aタイプ

MS−05の初期生産型。これにより教導機動大隊が編成され、パイロットの養成や、戦闘技術の研究がおこなわれた。また、モビルスーツ自体の改良、新型開発、武器テストの試験機ともなった。

●Bタイプ

MS−05の後期生産タイプ。外観はAタイプとかわらないが、コクピットや装甲の材質などが改良されている。モビルスーツによる初の実戦部隊は、このBタイプで編成された。



MS−06ザクII

今次大戦で、名実ともにジオン軍の主力モビルスーツとなったのが、このMS−06ザクIIである。MS−05ザクを全面的に設計しなおしたもので、完成機はMS−05と形状がことなったため、新しい型式番号があたえられた。もっとも多くのバリエーションをもっている。

Aタイプ

MS−06ザクIIの、初の量産機である。両肩のアーマーが、スパイクのない丸形なのが特徴である。生産機数はさほど多くなく、Cタイプにひきつがれた。

Cタイプ

開戦時の主力モビルスーツであった。外観は、いわゆる〝ザク〟型となった。

Fタイプ

もっとも多くつくられたタイプで、たんに〝ザク〟とよばれる場合は、この機種をさす。外観はCタイプとおなじ。すべてのモビルスーツの基本となった。

FSタイプ

Fタイプの頭部に、三十ミリ機関砲四門を増加装備し、白兵戦における戦力を強化したタイプ。ガルマ＝ザビ大佐の愛機が、このタイプである。

Sタイプ

Fタイプのメーン推進ロケットの推力を、百三十トンに強化したタイプで、おもに、中隊指揮官以上のベテランパイロットむけに生産された。シャア＝アズナブル少佐の使用機も、このタイプ。

Rタイプ

Rタイプは、MS－06シリーズの、高機動空間戦用バージョンである。改良をかさねた結果、外観こそそれまでのザクⅡと大差ないものの、内部機構はべつのモビルスーツとなっている。操縦はむずかしくなったが、戦闘能力は向上し、多くのエースパイロットに愛用された。

Eタイプ

CタイプやFタイプを改造してつくられた戦略強行偵察機。大戦中期には、さらに改良され、複合探知システムを搭載したE－3タイプもつくられた。

Tタイプ

大戦初期に使用された練習機で、おもにCタイプより改造された。教官用のコクピットが増設されたことが、ただ一つの改造点である。

Jタイプ

陸戦用ザクで、Fタイプから地上戦には不要の空間戦装備をとりさったもの。Jタイプは、地球攻撃軍の地球侵攻にともなって、現地の工作部隊でも製造された。

Dタイプ

砂漠や熱帯地方での戦闘を主目的に製造された機で、デザートタイプとよばれる。北アフリカ戦線のみに配備されたタイプである。

Kタイプ

対空防衛ザクとして計画されたが、重量バランスなどの問題を解決できず、試



作機におわった。なお、試作機は全機、実戦参加している。

Mタイプ

Fタイプを基本に、水中戦用に再設計されたタイプ。ザクの基本設計が空間戦用のものであったため、開発は思うようにすすまず、試験機におわった。のちに、MSM－01へ型式変更されている。

Gタイプ

Jタイプをさらに高機動化したもの。脚部に補助推進装置を搭載している。装甲も強化されており、MS－07グフよりも太くみえた。

Wタイプ

地球攻撃軍の工作部隊で組み立てられた、作業用のザク。正式な型式ではない。

Vタイプ

戦闘不能となったザクの上半身と、マゼラベースを組みあわせた大型作業用車両。地球攻撃軍の工作部隊によって、現地で改造された。

Zタイプ

MSN－02ジオングの開発にむけ、サイコミュシステムの試験機として製造された。Fタイプの改造といわれるが、頭部以外、ザクのイメージはない。

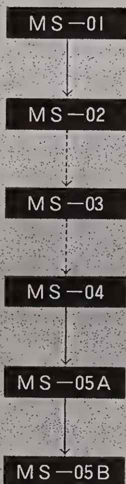
MSN－01

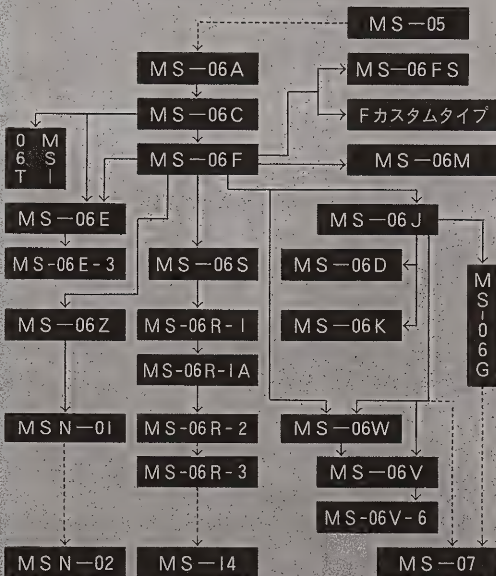
MS－06Z二号機の脚部を、大推力ロケットに換装したタイプ。高機動レベルでの、サイコミュシステムの実験に使用された。Zタイプより、さらにザクのイメージからはなれた機体となった。

●モビルスーツ開発の流れ

モビルスーツ史上、特筆すべき機種は、MS－06FザクⅡである。MS－01からMS－05ザクまでは、実戦型モビルスーツ開発という目的にむかう、ひとつの流れとしてみることができる。ところが、MS－06Fの完成により、モビルスーツ開発の方向に多様性が見いだされた。トータルバランスにすぐれたFタイプは、あらゆる改造のベースとして最適な機種であった。それまでの空間戦型だけでなく、陸戦型、水陸両用型など、あらゆる状況に対応した機種の開発が可能になったのである。

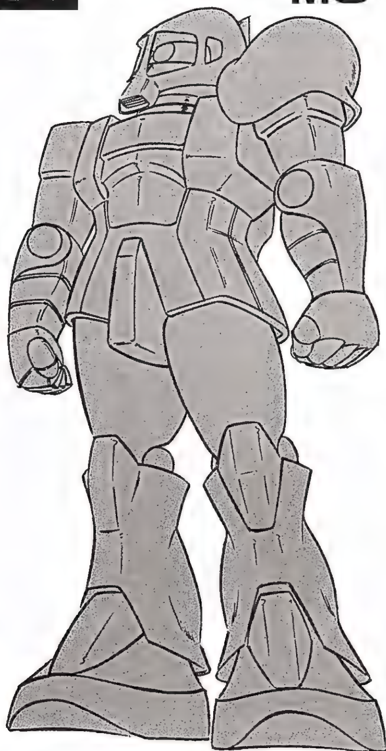
陸戦型および水陸両用型は、北米キャリフォルニアベースで開発がすすめられ、空間戦型は、ジオン本国で研究がおこなわれた。また、くわしいことはわかっていないが、モビルアーマー開発にも、ザクのデータが使用されたらしい。




エムエス　かいはつず
MS-06開発図
MS-05
MS-06A
MS-06FS
MS-06C
Fカスタムタイプ
06T MS-I
MS-06F
MS-06M
MS-06E
MS-06J
MS-06E-3
MS-06S
MS-06D
MS-06G
MS-06Z
MS-06R-1
MS-06K
MS-06R-1A
MSN-01
MS-06R-2
MS-06W
MS-06R-3
MS-06V
MS-06V-6
MSN-02
MS-14
MS-07

A タイプ

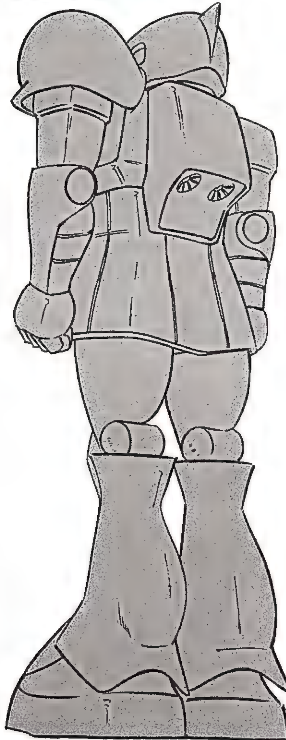
MS-05ザク

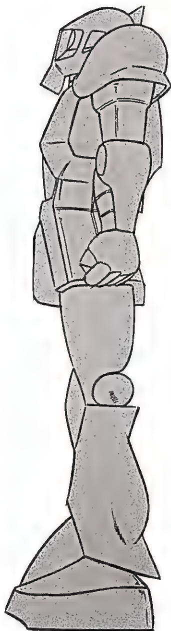


●Aタイプ

はじめての実戦用モビルスーツとして完成されたMS-05ザクだが、初期生産の二十七機によって、教導大隊が編成されている。このときの型がAタイプだが、まだ多少の改良を必要とするものの、十分に実戦にたえうるものであった。生産はすぐにBタイプに移行したため、製造機数はあまり多くないが、開戦から終戦にいたるまで、各戦線で使われつづけた。

MS—05A



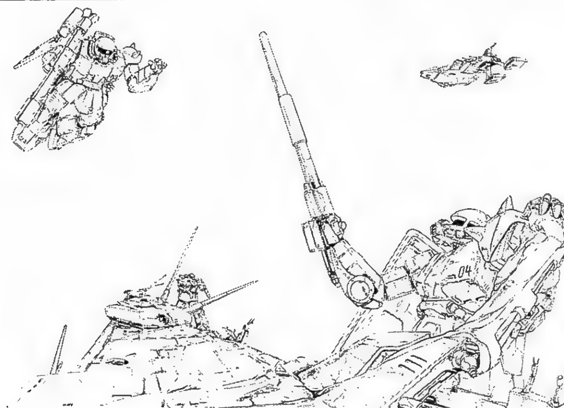


MS—05は，実戦部隊のほか，輸送・工作部隊でも使用された。とくに輸送部隊では好評で，大戦全期間中，使用されつづけた。

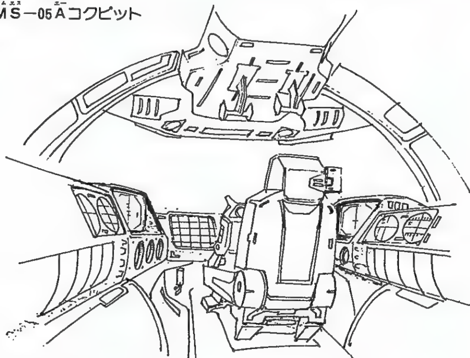
●MS－05の実戦参加

MS－05の配備は、宇宙世紀七六年五月に編成された教導機動大隊をかわきりに、宇宙世紀七七年末までに、すべての部隊の編成が完了している。開戦時には、一部にMS－06ザクⅡと入れかえた部隊があるものの、ほぼ全機が実戦参加している。MS－05が主力モビルスーツであった時期は短かったが、とりまわしがらくであったため、各戦線で愛用されつづけた。

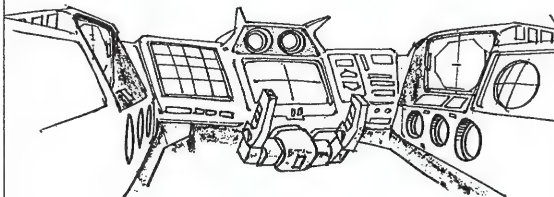
しかし、動力パイプを内装しているために動きがにぶく、新型のMS－06との混成チームを組むのはむりであった。このため、MS－06の生産がふえるにつれて、輸送・工作部隊にまわされていった。戦闘参加例が、ルウム戦役以降、あまりめだったもののないのは、MS－06が主力モビルスーツになったためである。



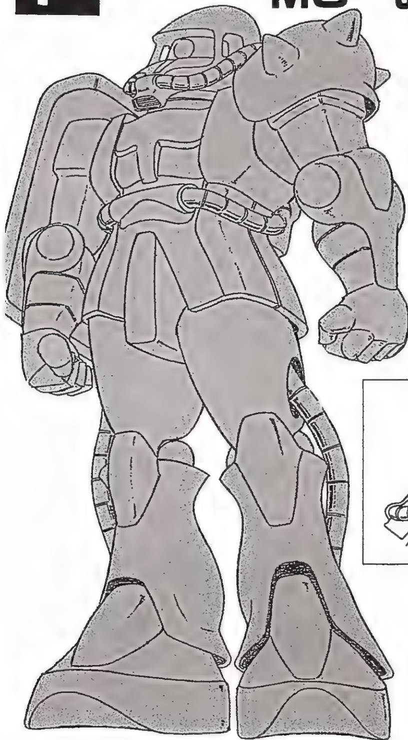
■MS—05Aコクピット



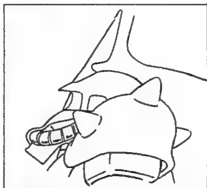
■MS—05Aメーンパネル



F タイプ
MS－06ザクⅡ

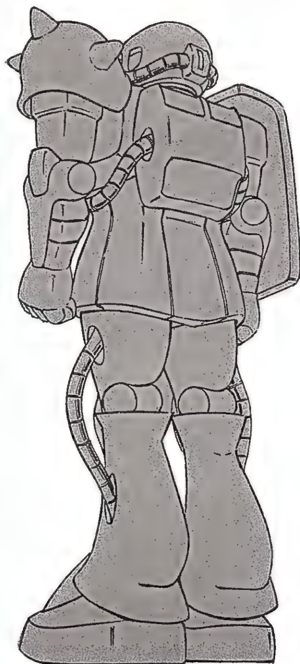


MS－06FザクⅡは、ジオン軍の主力モビルスーツであり、すべてのモビルスーツのもとでもある。MS－06としては、三番めに登場した機種であるが、それ以前のAタイプ、Cタイプと、内容的に大差はない。本機は、ジオン本国のほか、月基地グラナダ、制圧したコロニー内の工業ブロックなどでも製造された。



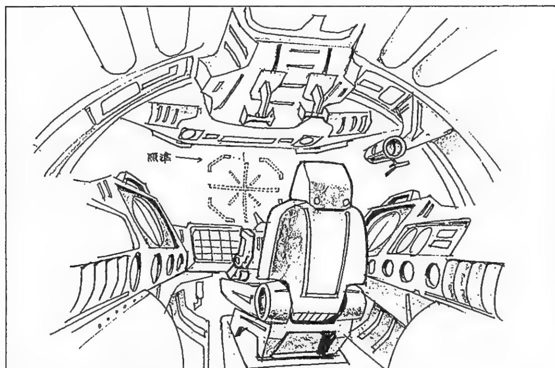
MS−06F

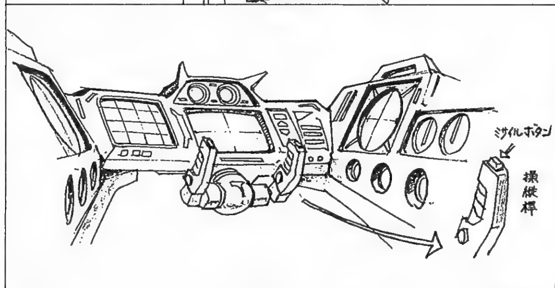




Fタイプは，生産された時期や工場により，細部が多少ことなっていた。また，Sタイプが登場するまでは，頭部に中隊長のマークをつけた機もあった。

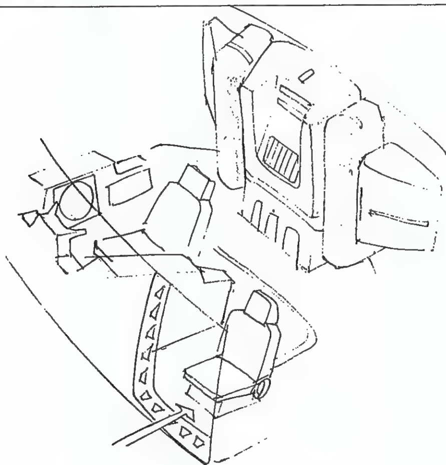
●Fタイプのコクピット



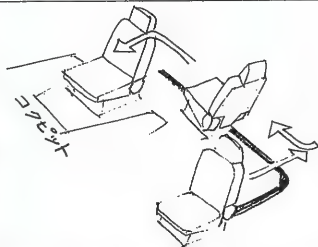


Fタイプのコクピットは，シンプルなレイアウトになっている。操縦は，パネル正面のコントロールスティックと，床のフットレバーでおこなう。頭上パネルには，腕を制御するマニピュレーターコントローラーがある。

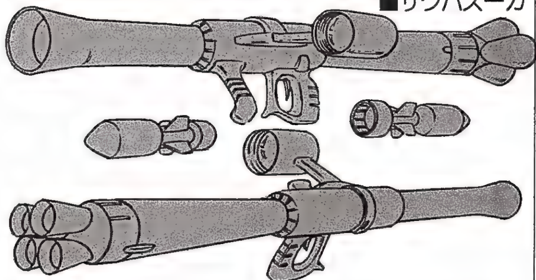
●搭乗方法



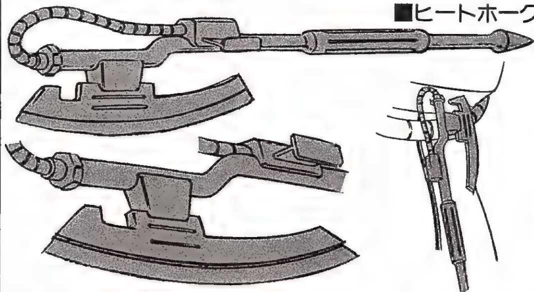
Fタイプの搭乗方法は，サイドイン方式といわれるもので，左胸のハッチからはいる。シートにすわると，シートが自動的にコクピットまで移動する。この方式は，正面装甲を強化できるという利点があるが，搭乗に多少時間がかかるという欠点もある。



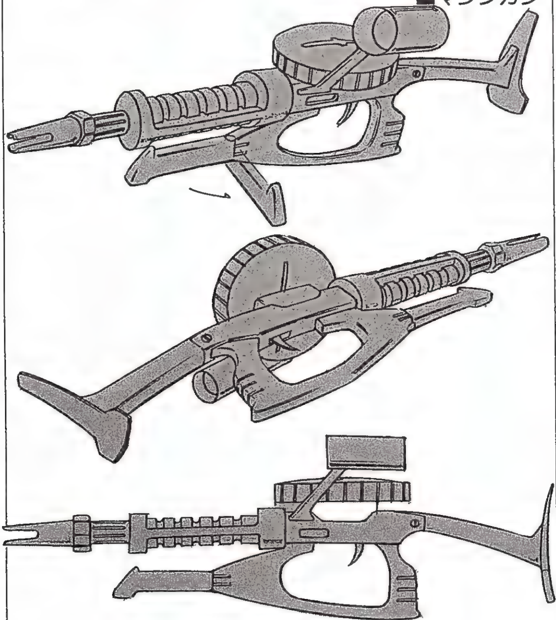
●ザク標準武装



口径 240 ミリのバズーカ砲。砲弾は，通常火薬によるものと，核弾頭をもつものの 2 種類がある。おもに対艦戦に使用される。



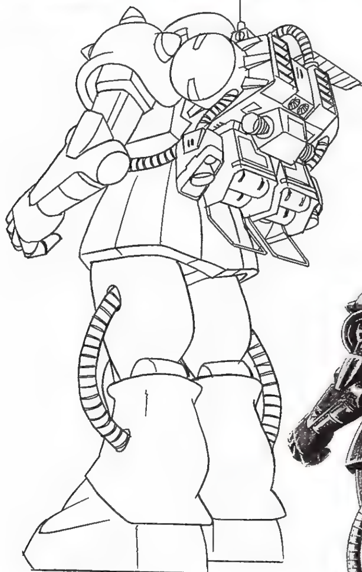
刃の部分に高熱を生じさせ，敵の装甲を切りさく。ザクの武装のなかでは，ただ一つの白兵戦用武器である。

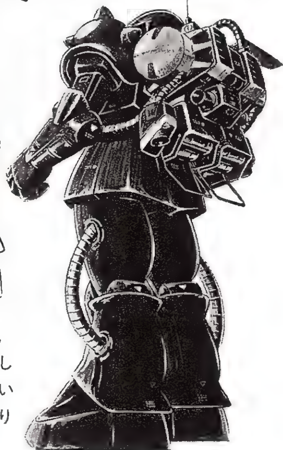


接近戦用の武器で，もっとも多用された。口径は 120 ミリで，単発と連射のきりかえができる。

F タイプ 機雷散布ポッド搭載機

ジオン軍の宇宙機雷敷設は、ルウム戦役直前から大戦末期ちかくまでおこなわれた。散布ポッド搭載のFタイプ三機と、ムサイタイプ一隻でチームを組み、作業していたようだ。

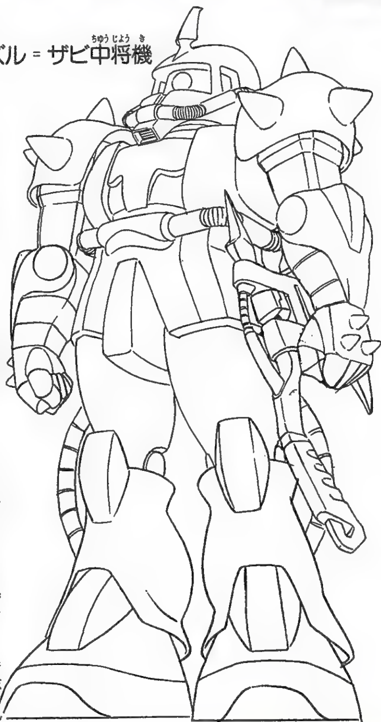




通常のFタイプ用ランドセルを，機雷散布ポッドつきのものと換装しただけだが，補助燃料タンクがついているので，ふつうのFタイプより航続距離が長くなっている。

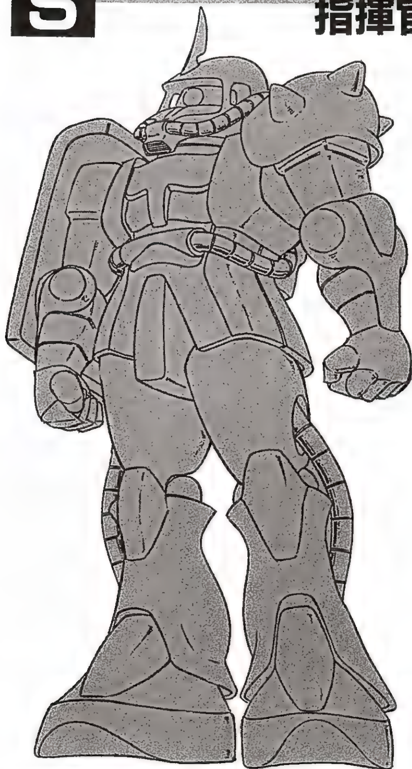
カスタムタイプF

●MS－06Fドズル＝ザビ中将機



このカスタムザクは、ドズル中将が戦場視察の名目で実戦参加したときの乗機である。Fタイプの両肩を四本スパイクつきのアーマーとし、ドズル中将の体格にあわせてコクピット容積を拡大した以外は、特別な改造はされていないと思われる。武器は、特製の大型ヒートホーク以外は使用しなかったと記録されている。
なお、本機は、ソロモン攻防戦のおり、連邦軍の攻撃をうけて、格納庫内で焼失している。

S タイプ 指揮官用ザク

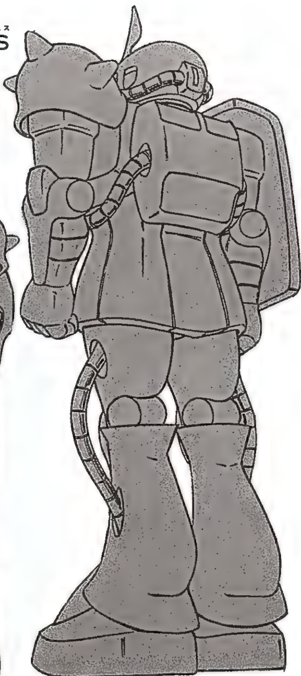


練度の高いパイロットの要望に応じたかたちで、機動性の高いSタイプが生まれている。Fタイプから発展したモデルで、推進エンジン出力を三十パーセントアップさせた、百三十トンクラスを二基装備している。生産機数は約百で、おもに指揮官むけとして配備されている。

●モビルスーツバリエーション

MSV MS―06S

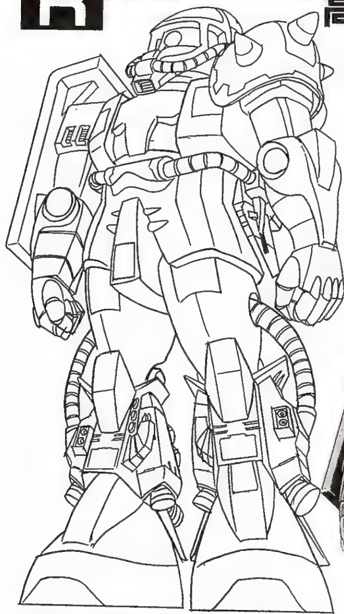
Sタイプは，〝赤い彗星〟のシャア＝アズナブル少佐の乗機として名高い。





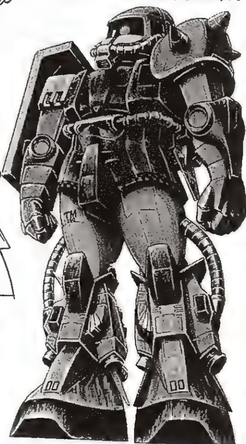
エンジンの高出力化にともない，燃料積載量の増加がはかられている。だが，基本的に少ない燃料積載量は，のちのちまで大きな問題であった。

R タイプ 高機動型ザク



●R－1タイプ

Rタイプは、それまで主力であったFタイプの性能向上を目的として計画された。開発はグラナダ基地でおこなわれ、エリオット＝レム少佐による二週間にわたる各種テストがおこなわれたのちに、量産が開始された。



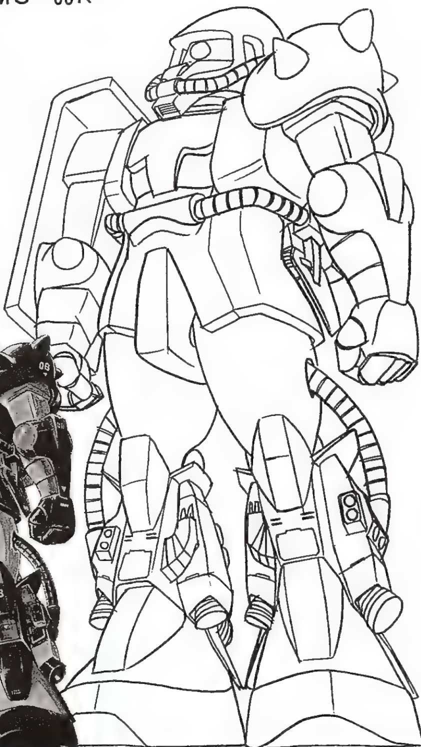
Rタイプ開発には，Fタイプ後期量産型2機が使用された。改造は，背中，腰スカート，脚部の3点にしぼられたが，最終的には全面再設計となった。初回生産数は22機で，実戦テストをかねて各方面へ送られた。

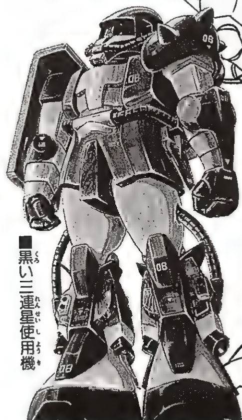
●モビルスーツバリエーション

MSV MS—06R

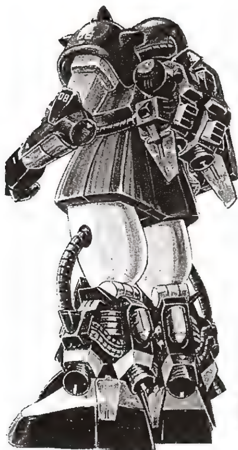
●R—1Aタイプ

R—1タイプの使用報告では、そのすぐれた戦闘能力をほめつつも、推進エンジンの不良と、燃料積載量の少なさが指摘されていた。





■黒い三連星使用機



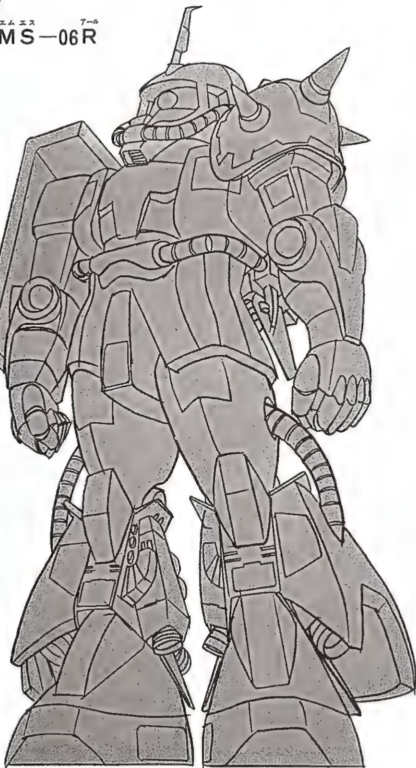
R－Iタイプで指摘された欠点を克服するため，推進エンジンを換装し，補助燃料タンクをカートリッジ化した，改良型のR－IAがつくられた。のちに，R－Iタイプのうち，10機ほどがR－IA仕様に改修されている。



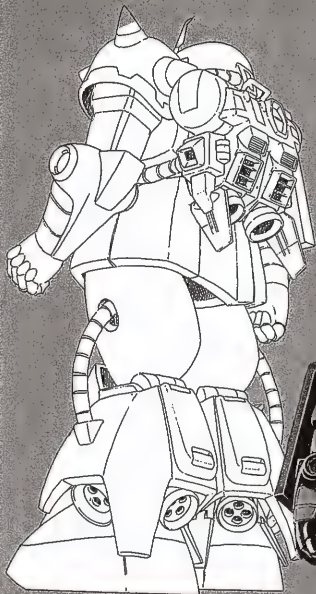
Rタイプは、稼動条件が複雑ではあったが、きわめて高性能でもあったので、各地のエースパイロットの評判はよかった。しかし、製造工程がこみいっており、コストが高くつくので、Fタイプのような大量生産にはいたらなかった。ベテランパイロットのあいだで、「連邦軍の戦艦をしずめるよりも、Rタイプを手に入れるほうがむずかしい。」とまでいわれていた。

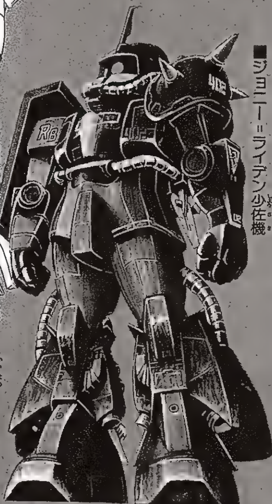
●R—2タイプ

大戦後期には、R—2タイプが開発されている。R—1Aとのちがいは、装甲材質の変更、脚部装甲の強化、燃料積載量の増加、搭乗方法の変更などである。R—2タイプは、MS—06Fの後継機選定でMS—R09リックドムとあらそったが、一部性能ではまさりながらも、総合性能ではリックドムにおよばず、四機が完成した時点で生産中止となった。



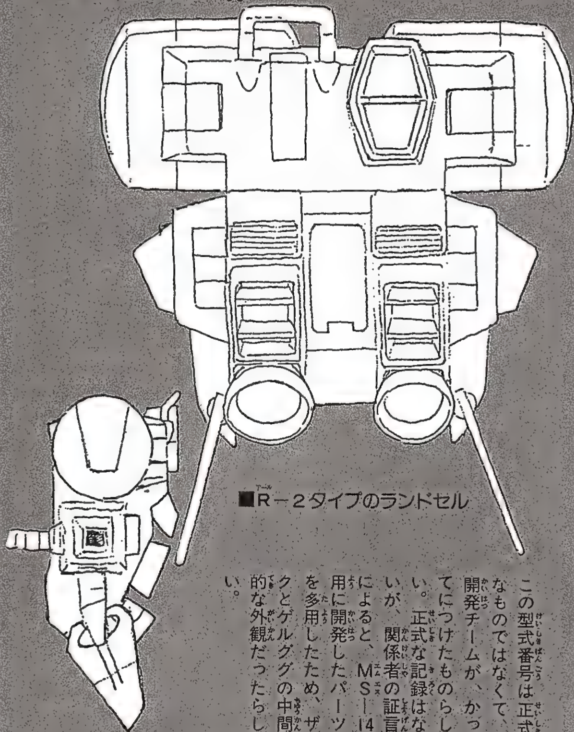
生産された四機のR－2タイプのうち、一機は開発チームにのこされ、三機はエースパイロットにまわされた。そのなかで、もっとも有名になったのが、赤く塗装された、ジョニー＝ライデン少佐機である。





■ジョニー＝ライデン少佐機

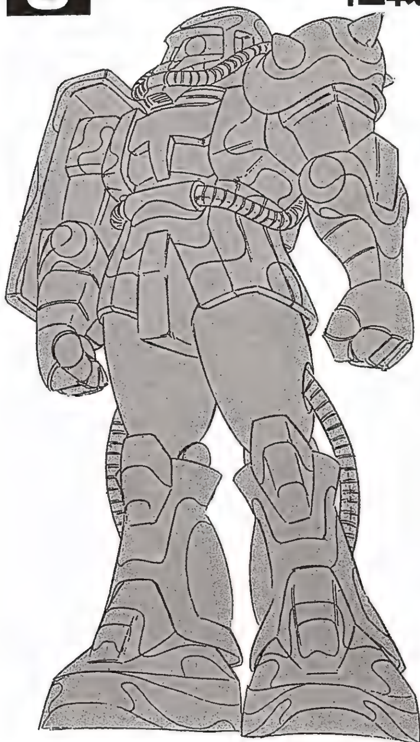
開発チームにのこされた一機のR－2は、腰を中心に徹底的に改造された。この機は、MS－06R－3ザクⅢとよばれ、MS－14ゲルググの試験機として使用された。もっとも、



■R−2タイプのランドセル

この型式番号は正式なものではなくて、開発チームが、かってにつけたものらしい。正式な記録はないが、関係者の証言によると、MS−14用に開発したパーツを多用したため、ザクとゲルググの中間的な外観だったらしい。

りくせんよう
陸戦用ザク

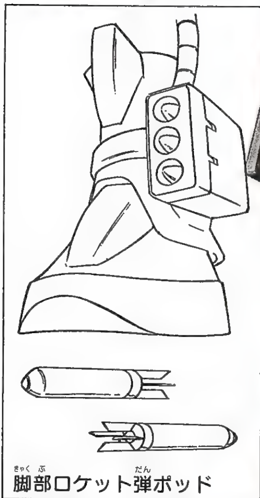


●Jタイプ

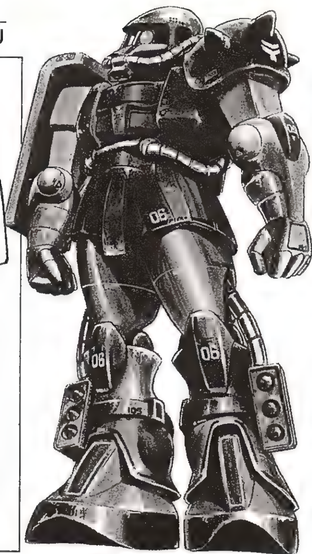
ジオン軍の地球侵攻にしたがって登場したのが、陸戦用モビルスーツである。その一番手、MS－06JザクⅡは、Fタイプの改造で生産された。Fタイプから、地上戦では不要な宇宙空間戦用の各種装置をとりのぞき、軽量化することによって、地球の重力によるパワーロスを少なくしている。Jタイプは、キャリフォルニアベースと、月面基地グラナダで生産された。

●モビルスーツバリエーション

MSV MS―06J



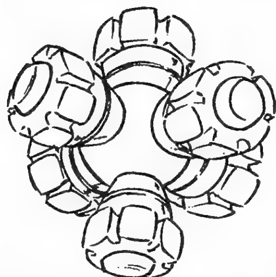
脚部ロケット弾ポッド



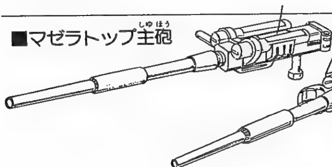
グラナダで生産されたJタイプは、第二次降下部隊から配備され、第四次降下部隊のときは、地球攻撃軍の主力となっていた。当初は、Fタイプのパイロットが搭乗したこともあり、重力下での実戦は思うようにいかなかったらしい。しかし、無重力の宇宙空間とちがい、反作用を気にせず機体各所にオプションの武装をとりつけられるため、Fタイプより柔軟な運用ができた。ざんねんなことに、Fタイプほど生産機数が多くないため、ほとんどが単独か、少数編成でしか前線に投入できなかった。

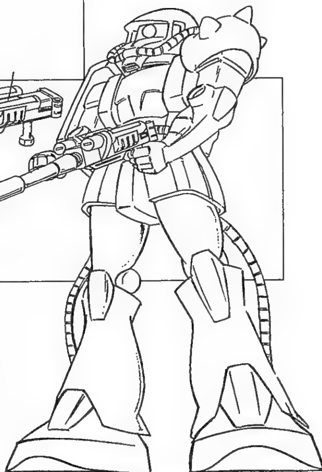
Jタイプの武装は、マシンガン、バズーカ、マゼラトップ主砲など、基本的にFタイプとおなじである。かわっている点は、クラッカーの使用と、オプションでとりつける脚部ロケット弾ポッドである。

■クラッカー



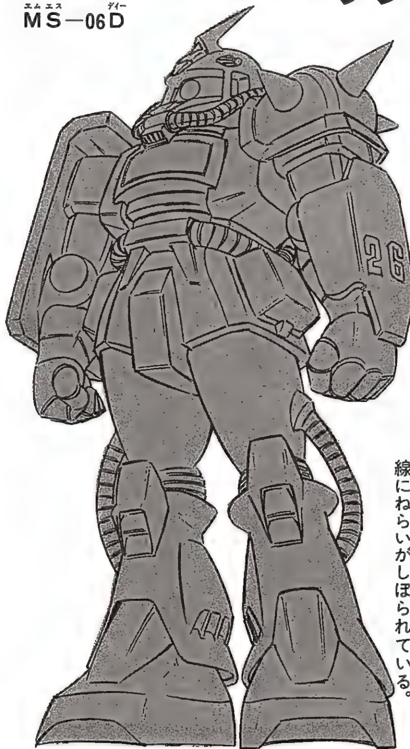
■マゼラトップ主砲





Fタイプの武器のうち、ヒートホークは、瞬間的に高熱をもつ刃の部分が、数回の使用で破損してしまい、あまり使用されなかった。

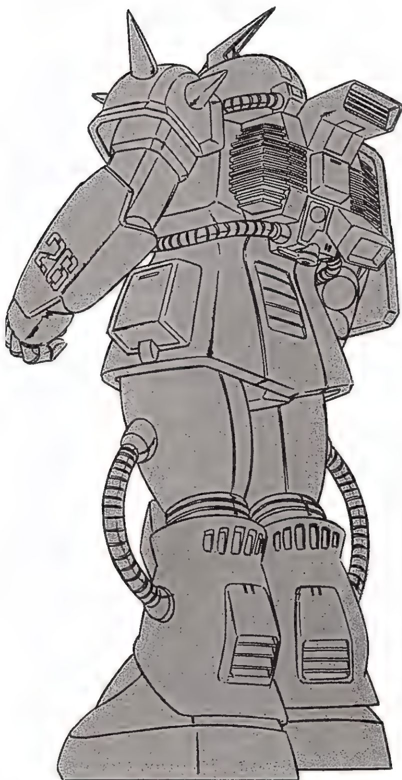
Dタイプ ザクデザートタイプ



●Dタイプ

ジオン軍の地球侵攻がすすむにつれ、ザクの改良型がつぎつぎと製作された。Jタイプにつづいて、キャリフォルニアベースで開発されたものは、局地戦用としてもっとも要望の強かった熱帯・砂漠戦用のDタイプであった。

当時、固定武装を強化した汎用モビルスーツとしてMS−07グフの開発がすすんでいたこともあり、Dタイプは、もっとも局地戦用モビルスーツを必要としていたアフリカ戦線にねらいがしぼられている。



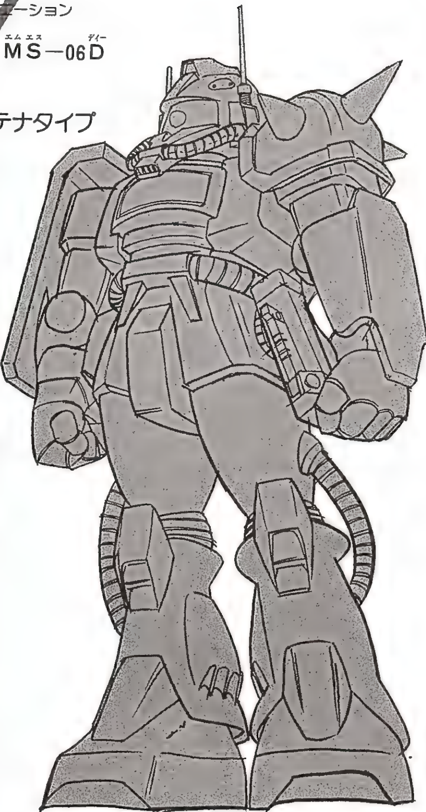
Dタイプは、それまでのJタイプの実戦データを十分に分析したうえで設計がなされている。機体の軽量化とともに、基本的な出力増加がはかられたほか、冷却装置の大容量化や部分的な装甲の強化がおこなわれた。また、砂漠での移動力強化のため、腰と脚部に補助推進ユニットが新設されたのも特徴である。総生産機数は百十四をかぞえたが、すべてアフリカ戦線に配備され、主力兵器として活躍した。

●モビルスーツバリエーション

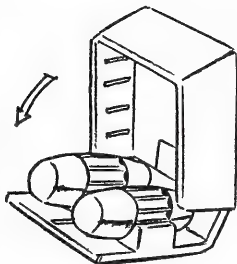
MSV MS―06D

●ダブルアンテナタイプ

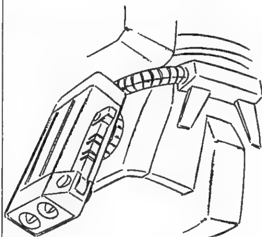
実戦テストをかねて、Dタイプが配備されたのは〝カラカル〟部隊であった。機種は、ダブルアンテナタイプとよばれる、頭部に短距離通信アンテナを二本装備したものだった。ほかの部隊へは、シングルアンテナタイプのものが配備されている。Dタイプの実戦部隊への配備は、大戦中期ごろだったようで、配備数の少なかったMS―09ドムの代役を十分にはたした。



■SA−712 クラッカーポッド

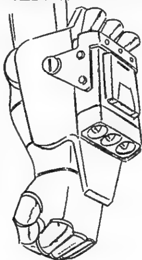


■ラッツリバーP−3
連装ミサイルポッド

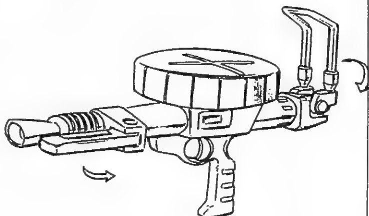


機体と同時に開発されたDタイプの武装も，それまでの戦闘データをもとに製作されており，Jタイプより地上戦むきになっている。

■ラッツリバー
3連装ミサイルポッド



■マシンガン



●モビルスーツバリエーション

MSV

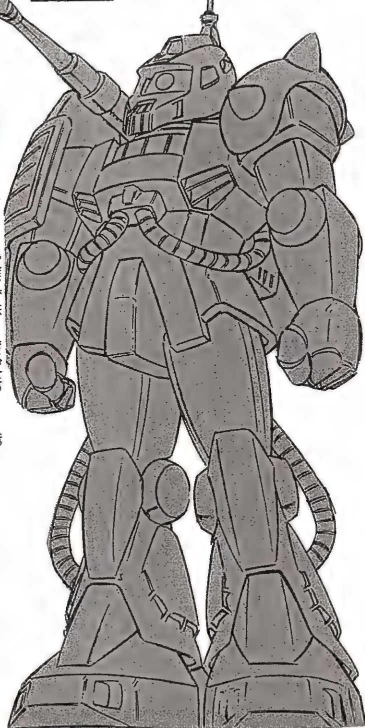
K ザクキャノン

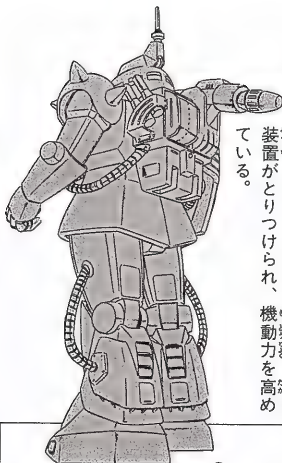
ケー タイプ

MS−06K

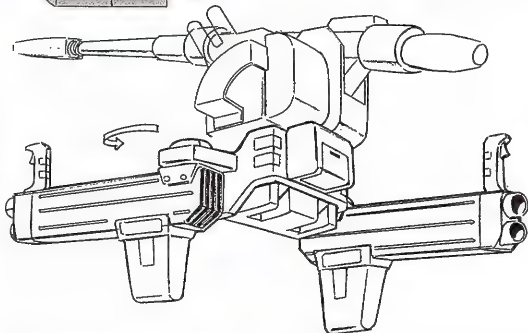
●Kタイプ

MS−06Kは、地上部隊の作戦行動時に、より機動性の高い対空防御手段として考案されたタイプである。当初のプランでは、Jタイプに対空砲をオプション装備するというだけのもので、重量バランスなどの問題を解決できぬままであった。その後、開発を担当していたキャリフォルニアベースへ、連邦軍のキャノンタイプモビルスーツの情報がはいり、計画が再検討されることとなった。コンセプト自体もみなおされ、対空防御を主目的とせず、対モビルスーツ戦における支援用に変更されたのである。





計画変更後、ほどなくして一号機がキャリフォルニアベースでロールアウトした。Jタイプとのちがいは、モニターアイを全周式にあらため、右肩に百八十ミリキャノン砲を装備したことである。このキャノン砲は通常火薬式で、背部のランドセルと一体化しており、通常のランドセルに換装すれば、Jタイプと同様にあつかうことができた。ほかにも、脚部にはMS－07グフで開発されたノウハウをいかし、補助推進装置がとりつけられ、機動力を高めている。

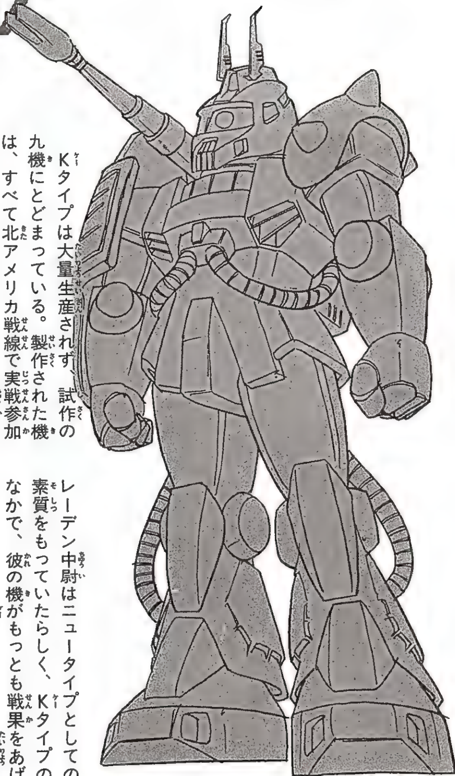


■キャノンパック

●モビルスーツバリエーション

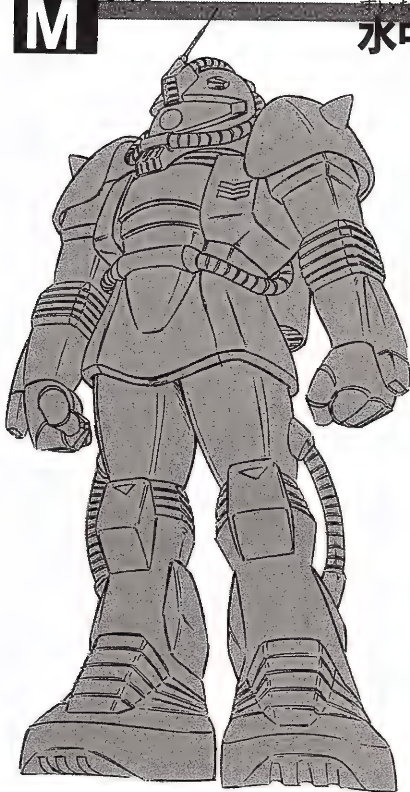
MSV

MS—06K



Kタイプは大量生産されず、試作の九機にとどまっている。製作された機は、すべて北アメリカ戦線で実戦参加した。そのなかで、グレーデン中尉が搭乗したのは、頭部のアンテナが二本ある、ラビットタイプとよばれるものであった。戦後の調査によると、グレーデン中尉はニュータイプとしての素質をもっていたらしく、Kタイプのなかで、彼の機がもっとも戦果をあげている。なお、Kタイプには、大量モビルスーツ戦を想定して、ビッグガンをランドセルにストラップで装着でき、実戦での使用例も報告されている。

水中用ザク



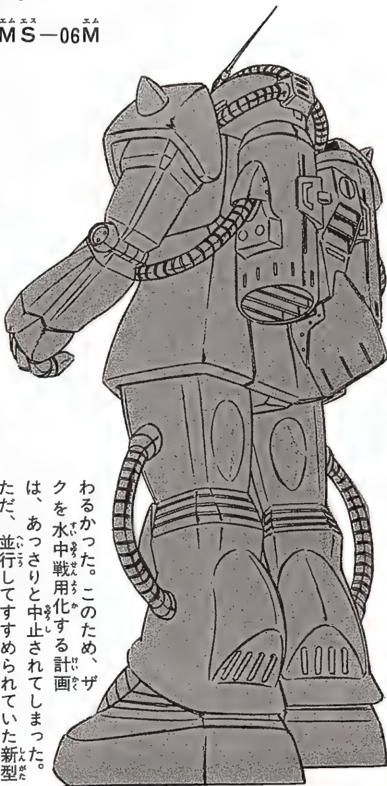
●Mタイプ

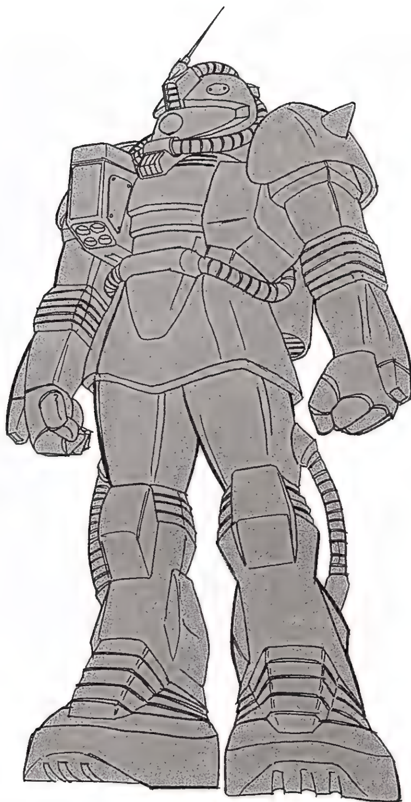
ジオン軍では、地球侵攻にさいして、水中行動も可能なモビルスーツの開発に着手していた。まず、MS－06ザクⅡを水中行動可能とする計画がたてられた。Fタイプをベースに、防水シールドをほどこし、水流エンジンつきのランドセルと、腕と脚に補助推進機を装備した。しかし、気密性の高いザクも、こと防水にかんしては改造がすすまず、開発は難航した。

MSV MS—06M

水中用ザク、MS－06Mの試作機は、五機製作され、北大西洋の潜水艦隊〝シーサーペント〟により実験がすすめられた。しかし、ザクの形状から水の抵抗が大きく、運動性はきわめてわるかった。このため、ザクを水中戦用化する計画は、あっさりと中止されてしまった。

ただ、並行してすすめられていた新型水中用モビルスーツ開発の試験機としては、使用されることになった。Mタイプは、その後、新型水陸両用モビルスーツの正式名称決定にともない、MSM－01と改名された。

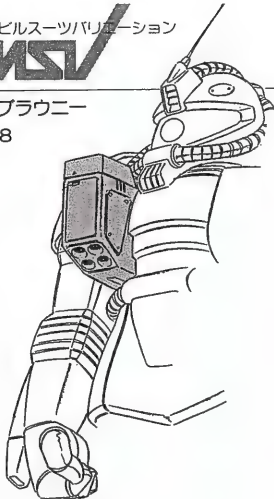




●MSM—01の実戦参加

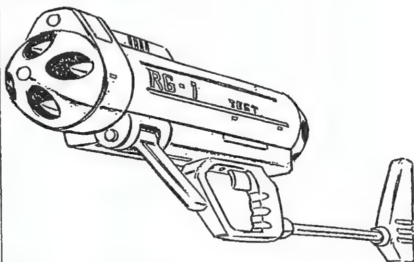
MSM—01（旧称Mタイプ）は、MSM—03ゴッグの量産化にともない、試験機の任はとかれたが、多少の武装はあったので、大戦末期には全機が実戦参加している。MSM—01は、二機の追加試作機をくわえ、合計七機あった。配備先は、〝レッドドルフィン〟と〝シーサーペント〟に二機ずつ、〝グリーンサイレン〟〝ナーガⅢ〟〝マンタレイ〟に各一機であった。

■ブラウニーM8



MSM-01が実戦参加したときのおもな武装は、ブラウニーM8タイプの二百四十ミリ四連装ロケット弾ポッドであった。テスト段階から良好だったこの兵器は、追加生産され、ほぼ全機に装備されていた。

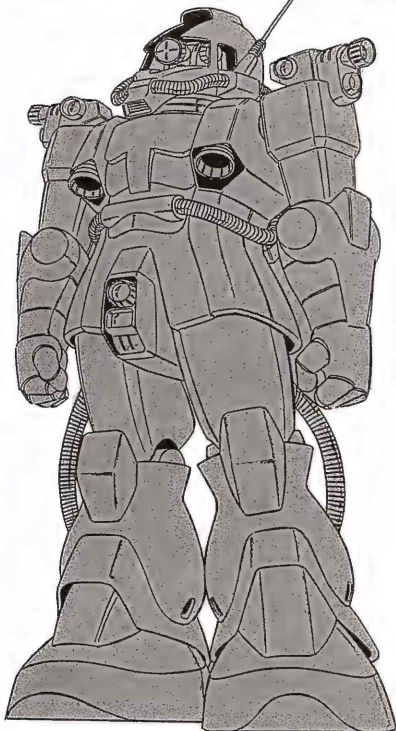
■サブロックガン



M8タイプ以外の武器では、サブロックガンがあった。水上艦艇攻撃用であるが、記録が失われているため、詳細は不明である。

E タイプ

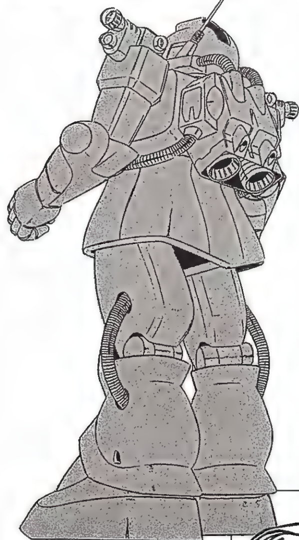
ザク強行偵察型



●Eタイプ

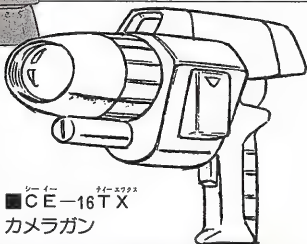
大戦初期におけるジオン軍の一方的勝利をもたらした要因のひとつに、この強行偵察型のEタイプの存在があげられる。このEタイプは、CタイプやFタイプから兵器として必要な部分を排除し、積載燃料を十パーセント増加し、機体各部に探知システムを装着したものである。基本的には武器をもたないが、必要に応じて武装も可能であった。

MSV MS−06E

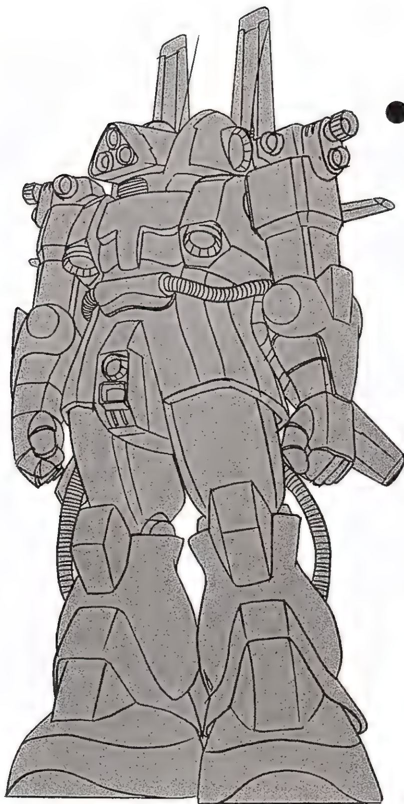


頭部モノアイのガラスシールドを廃止し、接近戦用カメラを大口径の高精度型に換装。また、モノアイゲージのカッティングにより、縦方向へのロールが可能となっている。ランドセルの推進ロケットは、大出力のSタイプのものを使用し、胸部左右には緊急離脱用ロケットも装備されていた。装甲はノーマルザクとかわらず、武装したEタイプは、Sタイプとかわらない戦闘能力をみせた。

装甲をはずした両肩には、左右方向にカメラガンが装着された。さらに、腰の関節ブロックを前方に延長して、カメラを収納していた。



■CE−16TX
カメラガン

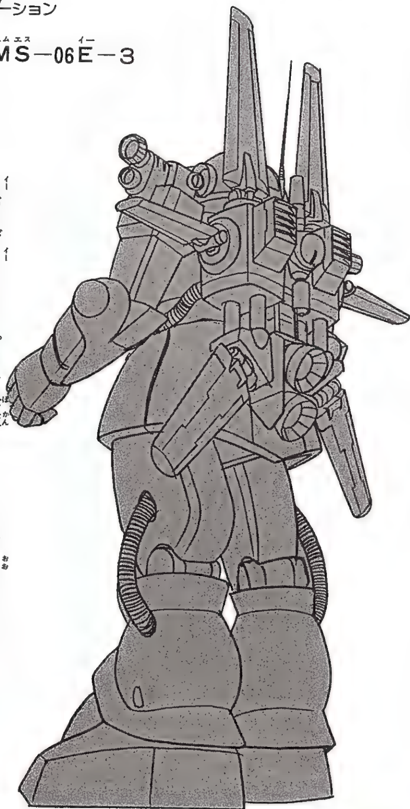


●E－3タイプ

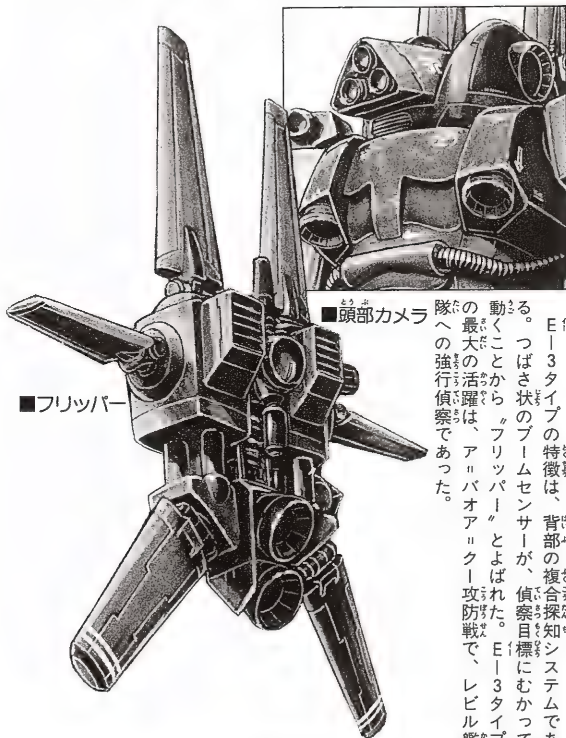
大戦中期には、高性能強行偵察型のE－3タイプが登場した。このタイプは、頭部カメラを三基一体型とし、背部に折りたたみ式の複合探知システムを装備していた。Eタイプがカメラによる光学的な偵察しかできなかったのに対し、E－3タイプは、レーザーや超音波による探知も可能であった。とくにミノフスキー物理学を応用したシステムは、広範囲を精密に偵察できた。

MSV MS−06E−3

EおよびE−3タイプは、母艦より発進するときに増速用ブースターと予備タンクをつけ、超高速を利用してミノフスキー粒子下の連邦軍施設や艦隊に強行偵察をおこなった。一部は地上でも使用され、軽装での活動をすることが多かった。強行偵察型が、自由自在に偵察活動をすることができたのも大戦中期までであった。後期にはいると連邦軍の戦力も整備され、撃墜される機もではじめたからである。



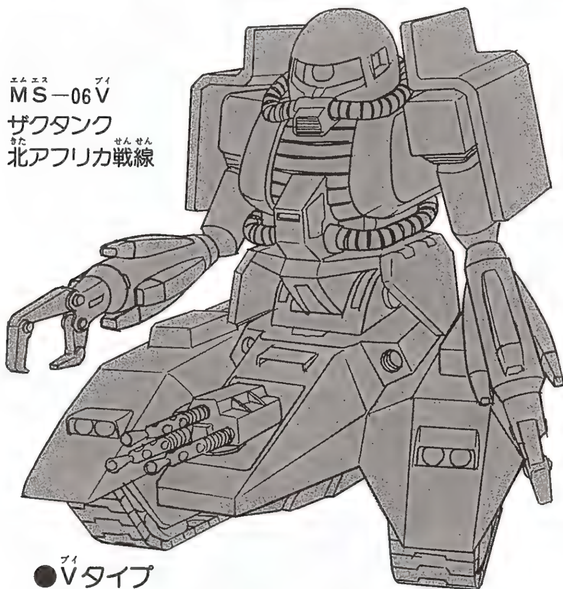
●E－3タイプの探知システム



E－3タイプの特徴は、背部の複合探知システムである。つばさ状のブームセンサーが、偵察目標にむかって動くことから〝フリッパー〟とよばれた。E－3タイプの最大の活躍は、ア＝バオア＝クー攻防戦で、レビル艦隊への強行偵察であった。

●モビルスーツバリエーション MSV

V（ブイ）タイプ ザクタンク



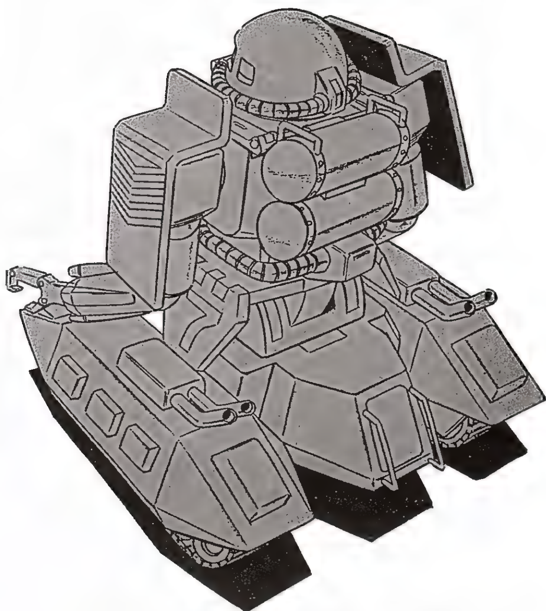
MS—06V
ザクタンク
北アフリカ戦線

●Vタイプ

モビルスーツの性能は、戦闘時だけではなくて、作戦終了後の施設占拠、建設作業などにも、人形であることを十分に活用できるよう考えられていた。

ところが、大戦がはじまり、戦闘が激化すると、モビルスーツはすべて戦闘にふりわけられ、一般的な作業などにまわす

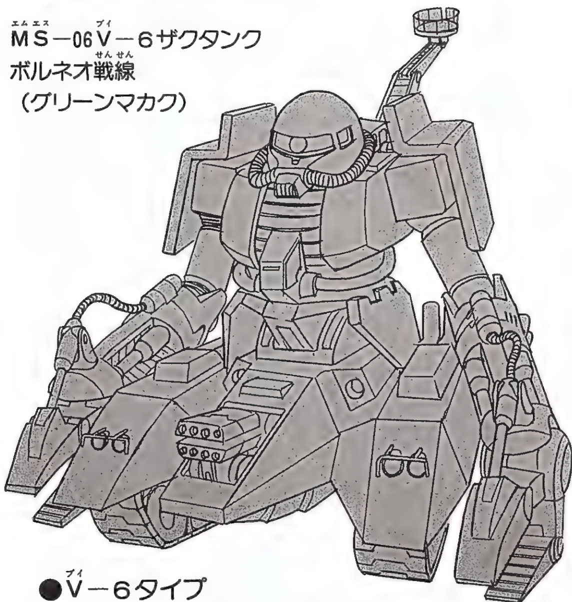
（次ページへ）



（前ページより）

ことはできなかった。そこで、戦闘能力を失ったザクとマゼラベースを組みあわせて、大型の作業車両が製造された。これは、アフリカ戦線の工作部隊によって、廃物利用でつくられたものであるが、十分実用にたえたため、のちにVタイプとして承認された。

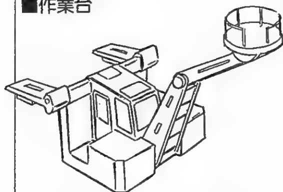
MS—06V—6ザクタンク
ボルネオ戦線
(グリーンマカク)



●V—6タイプ

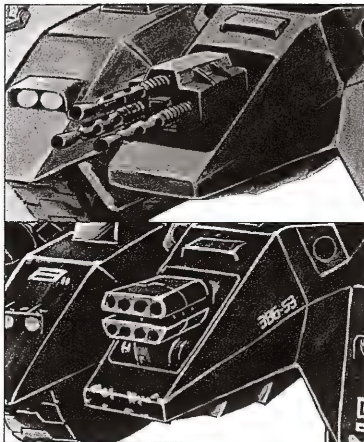
Vタイプは，すべて現地での工作によったため，数多くのバリエーションをもつが，そのほとんどが失われてしまった。このV—6タイプは，残存する数少ないもののひとつで，ボルネオ地域で，〝グリーンマカク〟とよばれていた。大型マニピュレーターをそなえ，作業性能が向上している。

●ザクタンクの増加装備





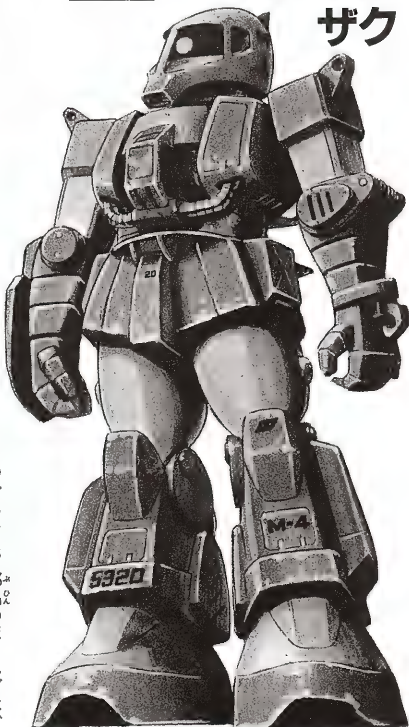
ザクタンクは作業用装備として，ユニット化された多目的作業台や荷物デッキを背部に装着していることが多かった。



●ザクタンクの武装

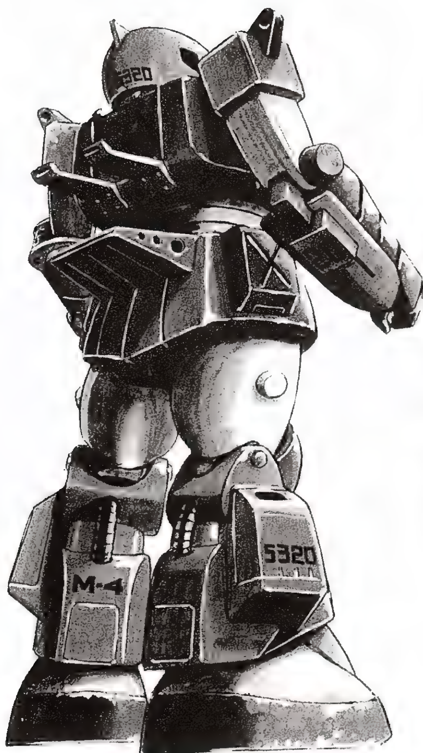
ザクタンクの当初の目的は一般作業用であったため、組みあわせられたマゼラベースにあるもの以外、武装はもたなかった。しかし、大戦末期になると、兵器不足をおぎなうために再武装され、戦闘に参加する機もでてきた。だが、どれほどの戦果をあげられたかは不明である。

W タイプ 一般作業用ザク



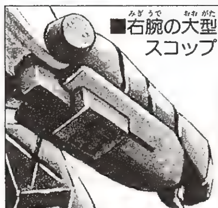
●Wタイプ

大戦中期から、アジア西部を中心とする地域で、一般作業用ザクが確認されている。戦後の調査によれば、これは、使用不能となったモビルスーツの部品を組みあわせて、現地で生産されたものであった。部品のほとんどは、MS－05やMS－06のものだったが、なかにはMS－07グフの部品を使用したものもあった。Wタイプという名称は正式のものではなく、前線における慣例的なよび名である。



Wタイプが使用されたのは、アジア西部からアフリカ戦線にかけて、地域的にかぎられていたため、このタイプのザクを知る者は少ない。Wタイプは戦闘前後の一般作業が目的であり、機体の各所に、荷物デッキ、ウインチ、大型スコップなどが装備されていた。なかには、モビルスーツ不足をおぎなうために、武装をほどこされた機体もあったようだ。

MS—06W


■右腕の大型スコップ


■背中の荷物デッキ

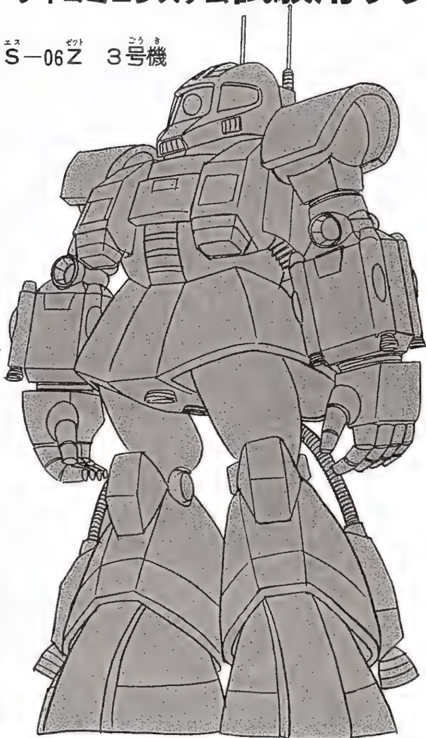

■左腕のウインチ

Wタイプの作業用装備は、ウインチなど一部をのぞいて、そのほとんどが現地の工作部隊により、それぞれの使用条件にあわせてつくりあげられたものだ。とはいえ、一種のスタンダードはあり、右腕に大型スコップ、左腕にウインチ、背中には荷物デッキという組みあわせが一般的であった。手は工業用マニピュレーターではなく、ザクの手をそのまま使用している。Wタイプの登場は、Vタイプよりもはやかったらしい。というのは、当時、アフリカ戦線の工作中隊でモビルスーツの整備・再生をおこなっていた隊員の証言に、「破壊されたWタイプの上半身と、砲塔を失ったマゼラアタックの組みあわせを研究していた。」というのがあった。

Zタイプ

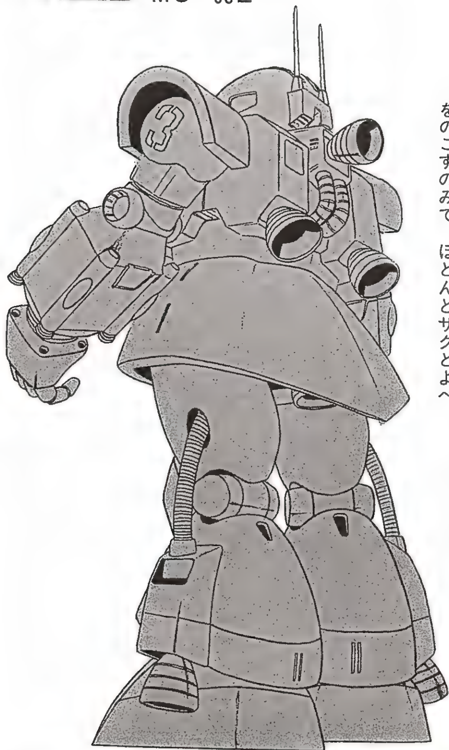
サイコミュシステム試験用ザク

●MS−06Z　3号機



ニュータイプのパイロット出現により、サイコミュシステムのモビルスーツ搭載が立案された。ひとあしさきに開発にはいったMSN−03ブラウ＝ブロのデータと、有線誘導ビーム砲の小型化によって、MS−16(仮称)のテスト機として、Fタイプをベースに、MS−06Zが試作された。

MS—06Z



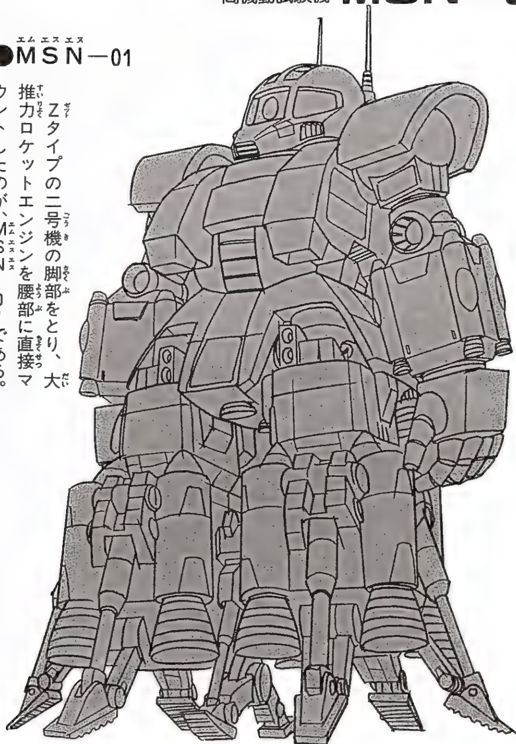
MS—16の半分のキャパシティーしかないとはいえ、Zタイプは可能なかぎりMS—16の仕様にあわせて製作されているため、頭部に共通のイメージをのこすのみで、ほとんどザクとよべるものではなかった。Zタイプは三機製作され、隠密のうちにおこなうテストを考慮して、機体はダークカラーで塗装された。

サイコミュシステム
高機動試験機

MSN－01

●MSN—01

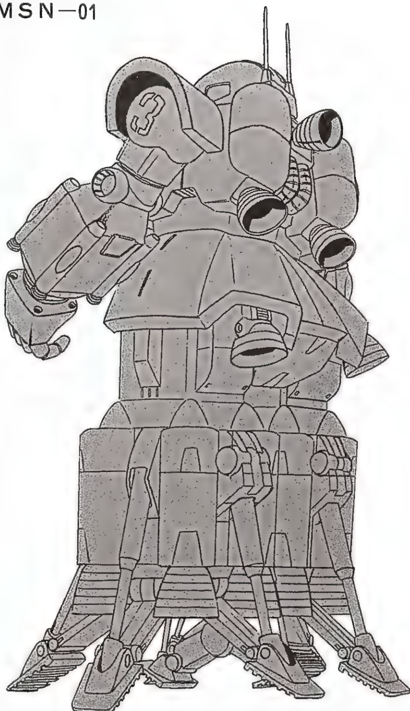
Zタイプの二号機の脚部をとり、大推力ロケットエンジンを腰部に直接マウントしたのが、MSN－01である。



MSN－01一号機

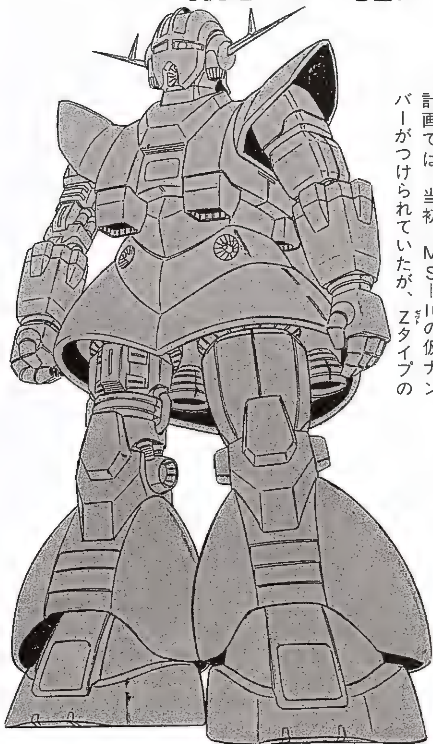
MSV MSN－01

燃料積載量の関係でZタイプではおこなえなかった、高機動レベルでのサイコミュシステム作動データ収集のため、MSN－01が製作された。しかし、ザクをベースとしたことからくる制約はまぬがれず、エンジンの稼動時間が短く、パイロットの技術によりデータにむらがあるなど、満足のいくテストはおこなわれなかった。



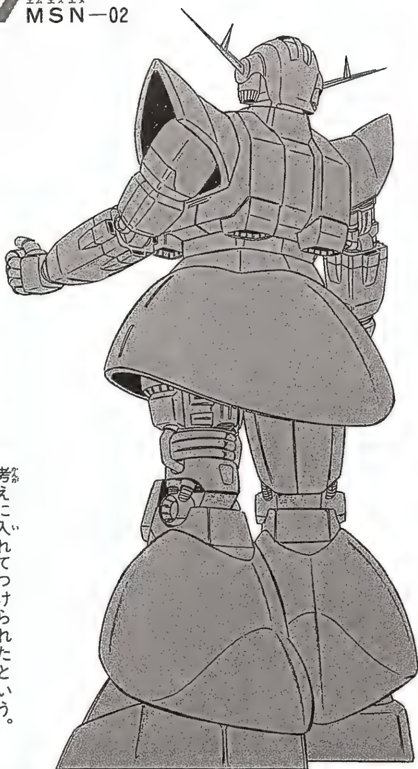
▲MSN－01の離着陸には，エンジンにとりつけられたランディングプレートを使用する。

MSN－02ジオング



究極のモビルスーツとして開発がスタートしたジオングは、ニュータイプパイロットの搭乗を前提として、有線誘導のビーム兵器を装備していた。計画では、当初、MS－16の仮ナンバーがつけられていたが、Zタイプのザクや、MSN－01でのデータ収集がすすむうちに、〝MSN－02ジオング〟という正式名称が決定した。

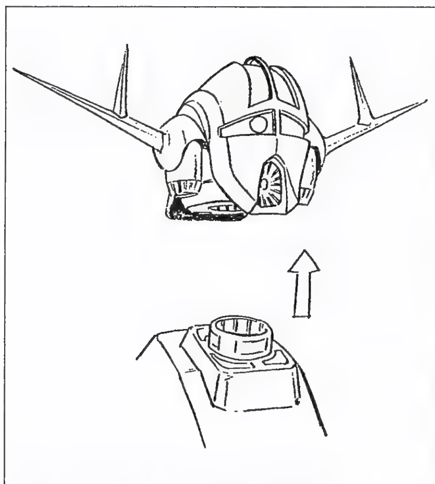
MSN—02



ジオングという名称は、究極のモビルスーツにジオン公国の名を冠することにより、国民の士気を高めることも考えに入れてつけられたという。

モビルスーツではあるが、陸戦用歩行ユニットをつけると、全高が三十八メートルにもおよぶ巨大なものになる予定であった。

●コクピット

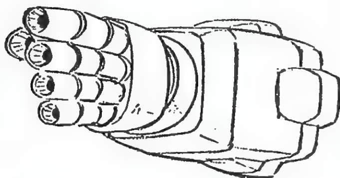


ザクの二倍の大きさをもつMSN―02は、その大きさを最大限にいかしたつくりになっているが、もっとも特徴的なのがコクピットである。それまでのモビルスーツでは胸部にあったコクピットを頭部にうつし、頭部はコクピットの機能だけでなく、機体から分離して、ビーム砲一門をそなえるサイコミュコントロールの小型モビルアーマーとしても使用できる。これにより、パイロットの生存率が高くなったのみならず、パイロットの技量によっては、頭部のみでモビルスーツ一機分の戦力をもつといわれる。機体を失っても、頭部のみで戦闘をつづけることができるのは、ア＝バオア＝クー攻防戦におけるシャア大佐の戦闘記録によって証明されている。

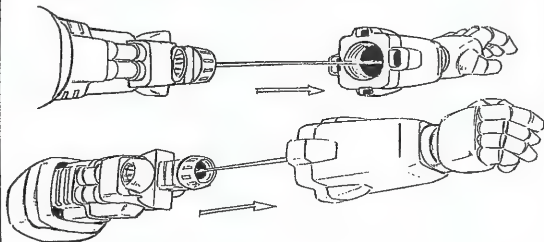
●ジオングのサイコミュシステム

主兵器としては、腕部そのものが五連装ビーム砲であり、そのほかに、頭部に一門、腰部に二門のビーム砲が装備され、それぞれサイコミュシステムでコントロールされる。

■腕のビーム砲



■有線式サイコミュシステム



ジオングの有線サイコミュシステムは，ＭＡＮ—03ブラウ＝ブロのデータをもとに，小型・高機動化がはかられている。

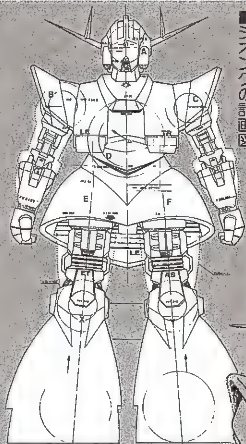


●ジオングの実戦参加

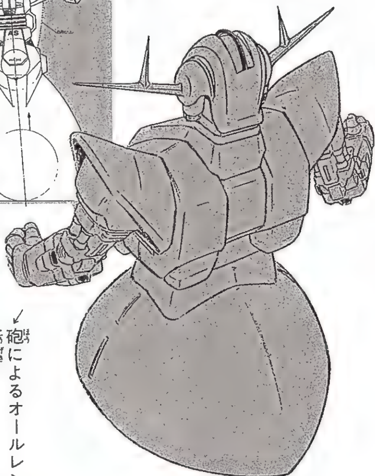
ジオングの１号機は，ア＝バオア＝クーの工場で製作がすすめられていたが，完成するまえに戦闘が開始され，歩行ユニットや一部の装甲を欠いたまま実戦参加しなければならなかった。パイロットはシャア＝アズナブル大佐で，連邦軍の無敵のＲＸ—78を撃破したが，みずからも大破した。

●MSN—02から MSN—03へ

MSN—02につづくMSN—03は、ケーブルなしの無線サイコミュシステムの搭載が計画されていた。これは、MAN—08エルメスのデータをもとに、機体が頭・胸・両腕・腰・両脚の七パーツに分離し、おのおのがビーム砲によるオールレンジ攻撃ができるように設計されていた。計画では、MSN—03ジオングと命名されていたが、仕様書きが提出されたところで終戦をむかえたため、実質的な開発はおこなわれなかった。



■ジオングの計画図



ジオン軍モビルスーツ開発史(2)

MS−06FザクⅡを起点とするモビルスーツ開発の流れは、空間戦用、陸戦用の二つにわかれていった。陸戦用はさらに、陸上戦用と水陸両用にわかれている。一方、空間戦用はさまざまなバリエーションを生み、サイコミュシステム搭載バージョンまで開発された。

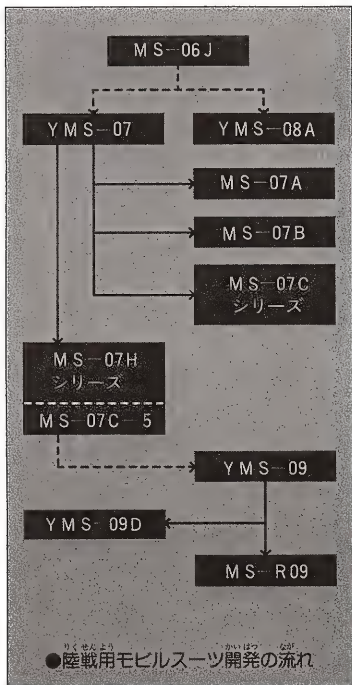
大戦後に連邦軍がおこなった調査でも、どれだけの数のモビルスーツが開発されていたのか、正確な実態はつかめていない。計画のみにおわったものもふくめると膨大な数にのぼると思われ、今次大戦においてジオン軍がモビルスーツに大きな期待をよせていたことがわかる。

その起点であるザクⅡを知ることは、モビルスーツ全体を知ることだといえる。

●陸戦用モビルスーツ

陸戦用モビルスーツの大部分は、北米キャリフォルニアベースで開発、生産されている。ザクⅡのバリエーションでは、J、D、Kタイプがこれにあたる。ほかに、局地戦用にねらいをしぼったMS−07グフと、MS−09ドムがある。

グフは局地戦用モビルスーツでおわったが、ドムは予想以上の高性能機にしあがったため、Jタイプにつぐ主力モビルスーツと目された。さらにドムは、地上用の熱核ジェットエンジンを宇宙空間用バーニヤに換装したMS−R09リックドムへと発展した。陸戦用から宇宙空間用へ改修されたドムの例は、モビルスー



●陸戦用モビルスーツ開発の流れ

ツ開発史上、めずらしい例である。おしむらくは、ドムにしろ、リックドムにしろ、開発・生産の時期がおそかったため、活躍した期間が短く、その性能を十分に発揮できなかったことである。

終戦直前に生産されたMS－14ゲルググは、空間戦用モビルスーツでありながら、陸戦用の性能も組みこまれていた。二つの分化した流れが、ゲルググにおいて統一されたといえるだろう。

●水陸両用モビルスーツ

地球表面積の七十パーセントをしめる海の存在は、ジオン軍のなやみのたねであった。本来、モビルスーツは、宇宙空間における接近戦を前提につくられており、水中戦能力はもっていなかった。そこで、地球侵攻作戦にあわせて、ザクを水中戦用に改修する案がたてられた。

こうして誕生したのが、Mタイプのザクである。このMタイプは、のちにMSM―01と名称がかわり、すべての水陸両用モビルスーツの基本となった。このあとのMSMシリーズの開発は、初の実戦型であるMSM―03ゴッグから軌道にのり、MSM―04アッガイ、MSM―07ズゴック、MSM―10ゾックと、つぎつぎに実戦に投入された。最終型式であるMSM―10ゾックは、モビルアーマー構想への過渡期に開発されたため、モビルスーツより、移動メガ粒子砲座とよぶにふさわしい形となった。

また、このMSMシリーズには、連邦軍本部ジャブロー攻略戦専用のモビルスーツがつくられている。アッグタイプとよばれたこれらのモビルスーツは、他の水陸両用モビルスーツ開発の副産物として生まれたものだが、ジャブロー攻略という限定された使用条件下では、十分な戦力となりえた。

これら水陸両用モビルスーツの開発が非常にはやかったのは、キャリフォルニアベースでの集中開発があったからだといわれる。なお、水陸両用モビルスーツは、東南アジア方面で陸戦用モビルスーツと混成配備された以外は、各地の潜水艦隊に集中配備され、上陸作戦の先鋒をつとめた。

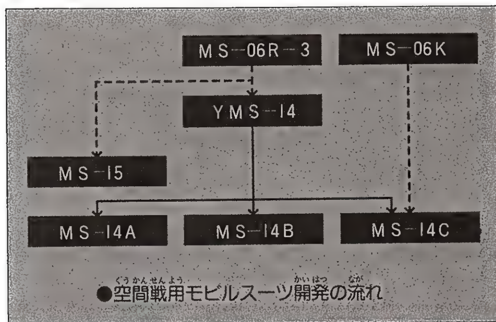


●空間戦用モビルスーツ

空間戦用モビルスーツは、開戦以来、MS－06FザクIIが主力であった。だが、着実に戦力整備がすすむ連邦軍のまえに、Fタイプの主力の座はゆるぎはじめてきた。当時、Rタイプが高性能をしめしていたが、練度の低いパイロットには操縦しきれなかった。

宇宙空間戦用の次期主力モビルスーツの開発がいそがれることになった。大戦中期に開発がすすんでいたのは、MS－06R－2ザクIIと、MS－R09リックドム、そしてMS－11の三機種であった。

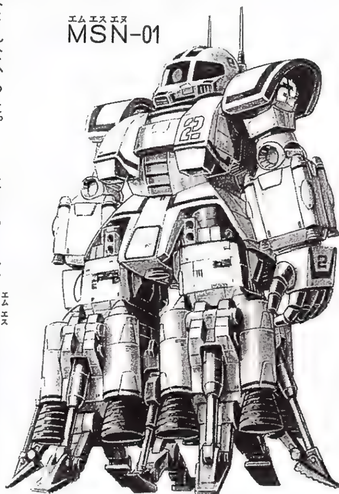
高性能を期待されていたMS－11は、開発がはじまったばかりで、標準装備のビーム兵器にいたっては、基礎研究の段階であった。急場しのぎとして、R－2タイプより総合性（次ページへ）



●空間戦用モビルスーツ開発の流れ

（前ページより）能にすぐれたR09タイプを配備し、MS－11の実戦配備までの時間をかせいだ。MS－11は、のちにMS－14ゲルググと名称を変更し、ア＝バオア＝クー攻防戦に大量投入された。同時期に、白兵戦用モビルスーツMS－15ギャンも開発されてはいたが、一機が実戦参加したのみで、量産はされなかった。

空間戦用モビルスーツに、サイコミュシステムを搭載したタイプも開発された。これは、ようやく注目されはじめたニュータイプのパイロットにむけたものだった。開発は、終戦の二か月まえからはじめられ、MS－16のナンバーがあたえられた。有線誘導によるビーム兵器をもつMS－16の開発にあたり、ザクを基本としてサイコミュシステムを搭載した試験機が、二種類つくられた。これが、MS－06ZとMSN－01である。





MS—16は、やがて、MSN—02ジオングとして開発をおえた。この究極のモビルスーツ、ジオングは、陸戦用歩行ユニットを装着すると、それまでのモビルスーツの二倍の大きさとなった。

特出したニュータイプのパイロットにとって、もはやモビルスーツが人形である必要はなかった。このため、つぎに計画されたMSN—03ジオングでは、機体が七つのパーツに分離し、それぞれがサイコミュシステムによりコントロールされ、オールレンジ攻撃ができるように設計されていた。

●モビルアーマー

汎用宇宙機として開発されたモビルスーツを陸戦用に改修していく段階で、局地戦に対する考え方がすすんだ。それは、モビルスーツ部隊と併用される支援用兵器の計画へと発展し、やがて、一連のモビルアーマーを生みだすことになった。攻撃力を重視してつくられたモビルアーマーは、移動支援火器として、モビルスーツよりはるかに重装甲・重武装化がほどこされた。これは、モビルスーツ研究において一歩先んじたジオン軍の、独特の発展のしかたであったといえる。

モビルアーマー開発の流れのなかにザクは位置していないが、技術や運用について、ザクのデータが活用されたことはまちがいない。

モビルアーマーも、サイコミュシステム搭載型まで開発されたが、モビルアーマーの性格を考えると、それは当然のすがたであるともいえる。なお、製作されたすべてのモビルアーマーは、なんらかのかたちで、すべて実戦参加している。

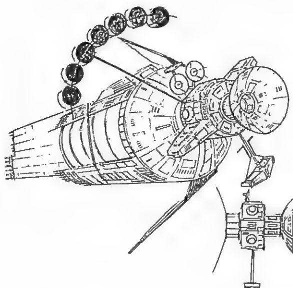
ジオン公国独立戦争史

●宇宙移民開始

二十世紀後半から、人口、資源、エネルギーの問題は深刻化していた。すでに地球にすめる人類の総数は、限界にきていた。人類は、地球連邦として一つの国家にまとまっていたが、人口問題を宇宙移民によって解決すべく、国家レベルでの大プロジェクトが組まれた。

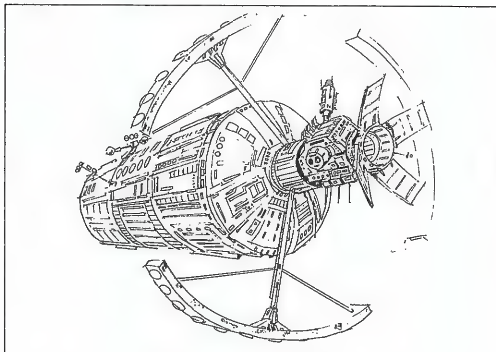
太陽と地球と月の引力の中和点であるラグランジェポイントに、つぎつぎとスペースコロニーが建設されていった。一つのポイントに四十前後のコロニーがつくられ、その一群を〝サイド〟とよんだ。

やがて移民が開始され、それを記念して、年号を宇宙世紀とした。



▲建設中のコロニー（サイド7）。

▼サイド3のコロニー。



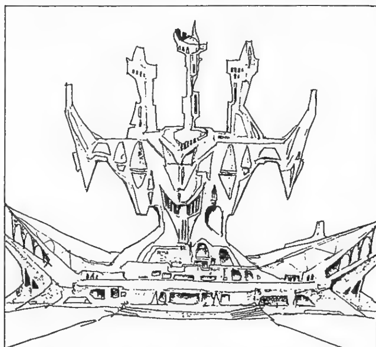
宇宙世紀四五年、ルナツーが完成し、サイド1とサイド2に移民が完了した。ルナツーは、各コロニーへ資材を供給する中継点であり、連邦軍の基地もつくられている。

すでに、このころから、宇宙移民者のあいだに地球ばなれの思想が生まれはじめていたが、移民計画は中止するわけにいかなかった。計画は以前にまして急進行し、サイド6までの移民が完了し、サイド7をもって完了する予定であった。

●サイド3の共和国宣言

宇宙世紀五八年、サイド3において、ジオン＝ズム＝ダイクンにより共和国宣言が発せられた。だが、地球連邦は、宇宙移民の地球ばなれ現象を知りつつも、この問題を重要視しなかった。

▼ジオン公国の首都ズム=シティにある行政府。



●ジオン公国の誕生

ジオン建国の主役であるジオン＝ズム＝ダイクンは四年後に死亡し、そのあとをデギン＝ソド＝ザビがうけついだ。デギンが実権をにぎってからのジオン共和国は、異例のはやさで国力を高め、軍事力も整備された。もちろん、そのなかには、モビルスーツの開発もふくまれている。この時代は、ミノフスキー粒子が発見され、ミノフスキー物理学の発展期であった。

　ジオンのモビルスーツは、対外的には作業用宇宙機と発表されていたが、世界の状況は確実に戦争への道をあゆみはじめていた。だが、地球連邦政府の高官たちは、地球からいちばん遠く、国力のおとるジオン共和国が、戦争をしかけてくるはずがないと、たかをくくっていた。

　が、宇宙世紀七九年、ジオン共和国からジオン公国へ体制が変化したサイド3は、地球連邦に対し独立戦争をいどんできた。



●一週間戦争

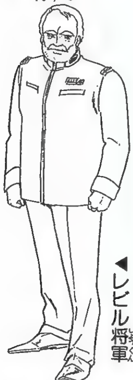
開戦から一週間、コロニー制圧からブリティッシュ作戦と、ジオン軍は破竹の進撃をつづけた。もし、コロニー制圧の直後に、ジオン公国と地球連邦のあいだで講和会議がもたれたならば、戦争はその時点でおわったかもしれない。だが、コロニーを地球へ激突させるブリティッシュ作戦は、連邦人民を無差別に殺害することとなり、連邦に徹底抗戦を決意させてしまった。長びく戦いにより、人類は、その人口の半数を失おうとしていた。

●ルウム戦役

開戦時、ジオン軍の侵攻に対し反撃できたのは、サイド5に駐留するレビル将軍指揮下の宇宙艦隊だけであった。そのため、サイド5のみが、ジオンの制圧をまぬがれた。

開戦一か月後、軍備をととのえなおした両軍は、サイド5宙域で史上最大の宇宙艦隊戦を展開した。これが、世にいうルウム戦役である。この戦闘により、両軍ともに壊滅的な打撃をうけ、戦局は膠着状態となった。

また、この戦役では、レビル将軍ののる旗艦が黒い三連星におそわれ、将軍が捕虜になってしまった。だが、将軍は、南極における両国の会議がひらかれているときに、奇跡の生還をとげている。


◀レビル将軍

MOBILE SUIT IN ACTION

MS－06D ザクデザートタイプ

アフリカから中東にいたる地域は、ジオン軍の完全制圧下にあった。

連邦軍は戦力の整備がおくれており、ジオンの勢力圏は、その戦力に比較してかなり広大な地域におよんでいた。

しかし、連邦軍は戦力の整備がおわると、ヨーロッパ反攻作戦、いわゆるオデッサ作戦を開始し、ヨーロッパにつづいて中東にも大部隊を投入してきた。

連邦軍は、まずスエズ運河の奪回に大部隊をさしむけた。この攻撃に対して、ジオン軍駐留部隊はモビルスーツによるゲリラ戦法で対抗した。この写真は、MS－06Dを主戦力とする部隊が、エジプト付近で奪還軍に対して攻撃を開始した直後のものである。くわしい部隊名などはわかっていないが、対戦した連邦軍の戦闘記録によれば、MS－06Dは三機だけだったようだ。

戦後の調査では、この時期、MS－09ドムの配備はアフリカ戦線にはじまったばかりで、中東に登場するのはもうすこしあとである。もし、このスエズ攻防戦にMS－07グフやMS－09ドムが大量に投入されていたなら、この戦闘にモビルスーツを投入していない連邦軍は、作戦に失敗していたかもしれない。


●モビルスーツ イン アクション
MSV
26

MS-06K ザクキャノン

ジオン軍発行の写真集のなかに、ザクキャノンのすがたをみることができる。この写真は宇宙世紀七九年十二月上旬、北アメリカ中部のロスアラモス付近で撮影されたものである。

当時の北アメリカのジオン軍は、地球方面軍司令ガルマ＝ザビ大佐の戦死以後、指揮系統の混乱をつづけていた。

連邦軍はこの機を利用して、北アメリカ反攻作戦を開始した。連邦軍の反攻ルートは、コースト山脈東部からフロリダ半島へむかう南下ルートと、中央アメリカの東シエラマドレ山脈からキャリフォルニアベースにいたる北上ルートをとっていた。写真のザクキャノンは、南下ルートをとってきた連邦軍輸送中隊のミデア輸送機に、対空攻撃をくわえているところである。後方にみえるザクキャノンは、グレーデン中尉の乗機である。頭部にある二本のアンテナが、みとめられる。

この戦闘で、グレーデン中尉はザクキャノンにのってからの撃墜記録を三十機にのばして、ジオン公国軍最高司令部から褒章を授与されている。

しかし、輸送中隊を全滅させた見返りは大きくて、連邦の護衛機との戦闘で、ジオン側はJタイプ一機を撃破、Kタイプ二機を中破されている。

この戦闘は、のちの戦局に大きく影響したわけでもないし、完全な勝利におわったわけでもない。しかし、Kタイプの記録中、もっとも有名な戦闘である。

●モビルスーツ イン アクション

MSV



MS-06K ザクキャノン

この写真は、大戦も後期にはいったころ、ジオン軍の広報部より発表されたもので、はじめてKタイプの存在があきらかになったものである。撮影日時については公表されなかったが、場所は北アメリカのキャリフォルニアベースと発表された。連邦軍諜報部の情報収集によっても、日時は宇宙世紀七九年十月中旬から十一月中旬としかわからなかった。

当時のKタイプは、試験がおわり、量産計画は却下されたものの、製作されていた機により実戦部隊が編成され、実戦配備の直前であったらしい。

写真発表時のジオン軍のコメントは、

「ザクの新型、Kタイプ(ザクキャノン)が、はじめて戦闘に参加し、連邦軍の航空機に多大な被害をあたえた。」というものであった。

この一連の、連邦軍によるキャリフォルニアベース爆撃作戦では、連邦軍の損害が、デプ＝ロッグ重爆撃機十二、フライマンタ戦闘爆撃機七、マングース攻撃機十一、フラットマウス偵察機一で、ジオン軍は、モビルスーツ十、ガウ攻撃空母一、その他、航空機十九、車両二十一であった。

ザクキャノンが、どれだけの戦果をあげえたかは、正確にわかっていない。しかし、少なくとも、グレーデン中尉や、アルフレディーノ＝ラム少尉らの乗機が、それぞれ三機以上の連邦軍航空機を撃墜したことは確認されている。

●モビルスーツ イン アクション

MSV



MS-06E ザク強行偵察型

大戦中、ジオン軍が積極的に戦場写真を公開し、国民の士気を高めるのに利用したのに対し、連邦軍は軍事機密がもれるのをおそれ、ほとんど写真を公表しなかった。

この写真は、連邦軍がEタイプザクを撮影したもので、戦争がおわるまで公開されなかった。公開にあたっても、内容の説明などはいっさいなされなかった。

写真から判別できるのは、撮影時期は大戦初期で、場所はルナツー付近ということである。写真中央にMS－06Eが二機あり、後方の一機は、迎撃発進したセイバーフィッシュ艦載戦闘機の攻撃をうけている。被弾箇所から、このEタイプは撃墜されたものと思われる。艦隊の艦同士の距離が近すぎるため、砲撃はおこなわれていないが、主砲方位盤はEタイプを指向している。

また、艦隊にコロンブス級の宇宙輸送船がみえる（写真左下）が、たぶん宇宙空母に改造された艦であろう。この改コロンブス級宇宙空母は、FF－S3セイバーフィッシュ、またはFF－X7コアファイター（ブースター搭載型）を二十五～三十機搭載できるものであった。

この写真にみえるセイバーフィッシュも、改造空母から発進したものであろう。

連邦軍の資料のなかに、これ以前にEタイプの写真がないことから、連邦軍がはじめてEタイプの存在を確認した写真であると思われる。


●モビルスーツ イン
MSV
24
025

MS-06M 水中用ザク

ジオン軍の公式写真集は、大戦中、四回刊行されている。MS－06Mの写真が掲載されているのは、大戦中期に発行された写真集で、北大西洋の潜水艦隊〝シーサーペント〟に配備され、性能実験をおこなっているところを撮影したものであった。

写真につけられたコメントには、「ザクは、多少の改造で、水中でも絶大な戦力となった。」とあるが、もちろん、これは事実とことなる。MS－06Mは、水陸両用モビルスーツ第一号機として試作機がつくられ、地球侵攻時に地球へはこばれた。おもに北アメリカ東部、ノーフォーク沖で、三週にわたって試験がおこなわれたが、ザクの形状からくる水中での運動性のわるさは、とても実用兵器として使用できるものではなく、ほかの水陸両用モビルスーツ開発の試験機として使用されている。

この写真は、第一回の総合性能試験中のものと思われる。二機のMタイプの左側および後方にユーコン級潜水艦がみえるが、これは〝シーサーペント〟所属のもので、この試験の母艦である。ほかにレスキューチャンバーやフロッグマンがみえることから、試験直前のものであろう。深度は、約四十メートルであると記されている。

戦後の調査では、サブロックガンによる対潜水艦戦闘のテストであったという説もあるが、詳細はいまだに不明である。

●モビルスーツ インアクション

MSV



MS-06V ザクタンク

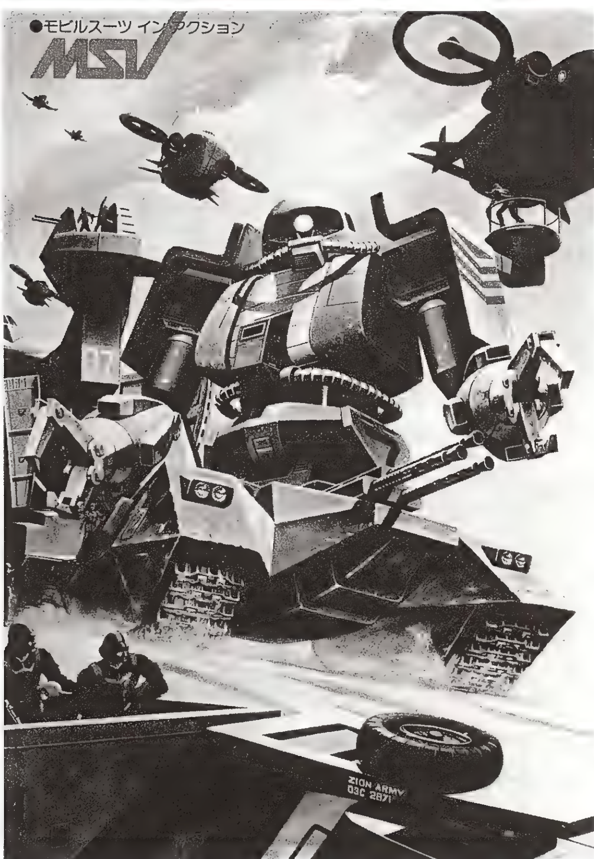
連邦軍は、ジオン軍の新型兵器や軍内部の状況を知るために、戦場における情報収集のほかに、ジオン国内の出版物やニュースフィルムなども利用していた。それらを入手するのは、サイド6にある地球連邦領事館の情報部の役目であった。

大戦後期にかかるころ入手されたジオンのニュースフィルムに、連邦軍の知らない型のモビルスーツがみいだされた。それが、MS－06Vザクタンクである。ニュース解説は、このザクタンクを、制圧した地球でのジオンの新しい国づくりの切り札であると紹介していた。

フィルムの撮影現場は、アフリカ戦線のリビア砂漠東北部と思われる。作戦行動まえに補給をうけている風景であるが、対空防御や警戒態勢がとられていないことや、ファットアンクル輸送機の数が多く、補給中にしてはあまりにも整然としすぎていること、また、ほかのモビルスーツや戦闘機のすがたがみあたらないことから、宣伝のために撮影されたものだとみられた。

戦後の調査により、やはり、ジオン国民の士気高揚のためにつくられた宣伝用フィルムの一本で、ジオン軍広報部制作のものであるとわかった。撮影には、アフリカ戦線の輸送部隊と工作部隊が協力し、戦闘部隊は参加していない。

なお、撮影に使用されたザクタンクは、撮影当日に完成した初号機で、試運転をかねた撮影であったという。


●モビルスーツ イン アクション
MSV
ZION ARMY
03C 2871

MS-06R-2 ザクII

大戦末期になると、ジオン軍は試作中の兵器であっても、戦闘可能と判断されれば、順次、実戦に投入していった。それら新鋭機の多くは、エースパイロットたちの搭乗機として使用された。

当時、連邦軍ではジオンの新兵器と、エースパイロットの動向に注目し、その情報解析にやっきになっていた。それというのも、連邦軍のサイド3（ジオン本国）進攻作戦の準備が大詰めをむかえて、ジオンの新兵器やエースパイロットの配備が、連邦の戦力配分にも大きく影響するためであった。

左の写真は連邦軍の作戦担当将校のあいだで、もっとも問題とされたもので、赤い塗装の新型モビルスーツである。すでに連邦軍では、ジオン軍がザクをしのぐ新型モビルスーツの開発に成功した情報をつかんでいた。しかも"黒い三連星"亡きあとの最高のパイロットである"赤い彗星"シャア＝アズナブル大佐が、新編成の部隊とともに戦線に復帰したという情報もえていたので、この写真はうわさされていたシャア大佐のMS－14ゲルググであると推定された。

しかし、この写真がソロモン攻略戦直後、テキサスコロニー付近で撮影されたものであることから、ジョニー＝ライデン少佐のMS－06R－2であることが判明した。

ちなみに、シャア大佐とMS－14ゲルググがテキサスにはいるのは、この数日後のことであった。


●モビルスーツ イン アクション
402
R3
402

MS-06R-1A ザクII

大戦初期から中期にかけて、ジオン本国では軍部の公式写真集や戦場のニュースフィルム以外にも、多数の写真が発表された。

そのなかでも、とくに人気の高かった写真が、モビルスーツのエースパイロットのものであった。左のシン＝マツナガ大尉のMS－06R－1Aは、比較的はやい時期に公表された。

この写真が発表された当時は、シン＝マツナガ大尉がソロモン方面で多数の戦果をあげたエースパイロットであるとだけ発表されている。

ジオン軍の記録では、撮影まえに前線より本国に召還されたシン中尉は、多数の戦果により大尉に昇進、褒章をもって戦功をたたえられた。また、搭乗機もMS－06Fから、新型のMS－06R－1Aにかわった。

R－1Aの慣熟訓練飛行は、ジオン本国でおこなわれ、テストの結果は良好であったようだ。この写真は、最終訓練飛行の日に撮影されている。

この種の写真は一般に、前線において撮影したものを発表する。しかし、シン＝マツナガ大尉の場合は、なぜか例外となっている。これは、シン＝マツナガ大尉の所属する、宇宙攻撃軍の総司令官であるドズル＝ザビ中将の指示によるといわれているが、実際には撮影に対する配慮というより、国民の士気高揚のために新鋭機をつかったのではないかと考えられている。


●モビルスーツ
MSV
573

MS-06R-1A ザクII

「ジェットストリーム＝アタック」というタイトルで発表されたこの写真は、今次大戦でもっともジオン国民の人気をあつめたものである。

撮影時期は大戦も後期にはいったころで、各地でゲリラ戦が展開されていた時期である。この写真もそのようなゲリラ戦のひとつで、グラナダ付近で作戦行動中のルナツー所属のパトロール艦隊に、黒い三連星が攻撃をしかけているところである。

この戦闘でジオンのゲリラ部隊は、連邦のマゼランタイプ一隻を撃沈、サラミスタイプ二隻を大破させ、多数の将兵を捕虜にしている。このうち二隻までの戦果が、ガイア少尉を中心とした黒い三連星によるものだった。

なお、写真を撮影したのは補給担当のFタイプである。

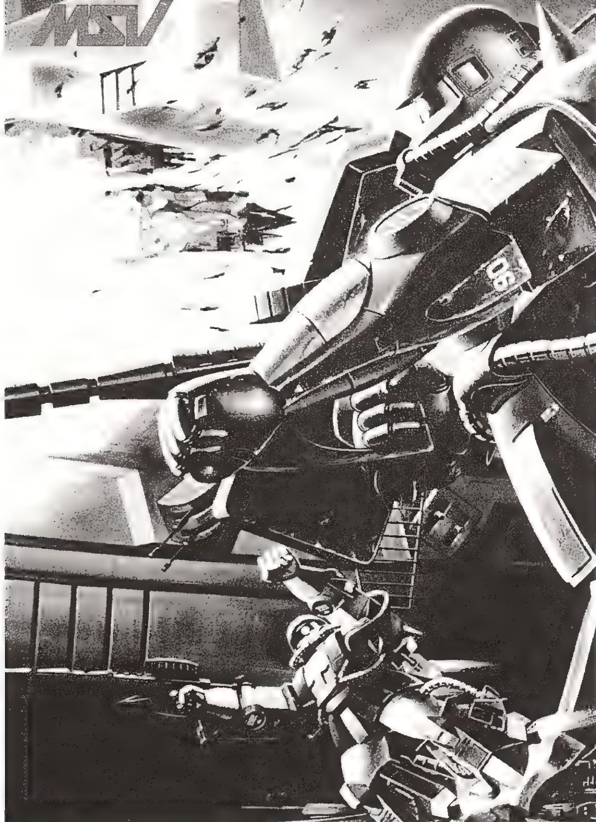
この戦闘のあと、ガイア少尉以下三名は、キシリア少将の命令で地球に降下、カスピ海西岸に配備された。地球での所属は、地球攻撃軍ではなくキシリア少将の突撃機動軍のままで、マ＝クベ大佐の指揮下におかれた。

地球におりた黒い三連星は、新型の陸戦用重モビルスーツMS－09ドムに搭乗した。三人には、量産初号機から三号機までがあたえられた。脚部の強力なホバークラフトによるジェットストリーム＝アタックは、宇宙空間での活躍をほうふつとさせたが、連邦のオデッサ作戦で、RX－78と対戦して全員戦死した。

●モビルスーツ イン アクション






○モビルスーツ イン アクション
MSV

MS-06R-1A ザクII

黒い三連星の写真のなかで「ジェットストリーム＝アタック」について有名なのが、前ページの写真である。

これは、サイド3近くに進入してきた連邦軍の強行偵察艦隊に対する攻撃で、ジェットストリーム＝アタックをかけた直後の白兵戦のもようを、友軍機が撮影したものである。

この戦闘は、黒い三連星がR－1Aにのってから、はじめての戦闘だったといわれている。

黒い三連星は、キシリア少将指揮下の突撃機動軍に所属した特務小隊で、つねに三機のモビルスーツによるジェットストリーム＝アタックをもちいた。メンバーは、小隊長A＝ガイア少尉と、オルテガ、マッシュの三人で、ルウム戦役以来のチームである。搭乗機はMS－05B、MS－06C、MS－06S、R－1A、MS－09ドムをのりついでいる。

チームのニックネームである黒い三連星は、三機のモビルスーツの、塗装の黒からきているというのが定説である。しかし、MS－06Cまでは、塗装がシーグレー一色だったことから、この説に疑問をとなえる関係者も多い。

MS－06Sにのりかえてからは、現在よく知られている黒、紫、グレーの三色のチームカラーに塗装されている。黒い三連星が地球におりてからつかったMS－09ドムにも、このチームカラーが塗装され、以後、この色がMS－09ドムの正式塗装となったのである。



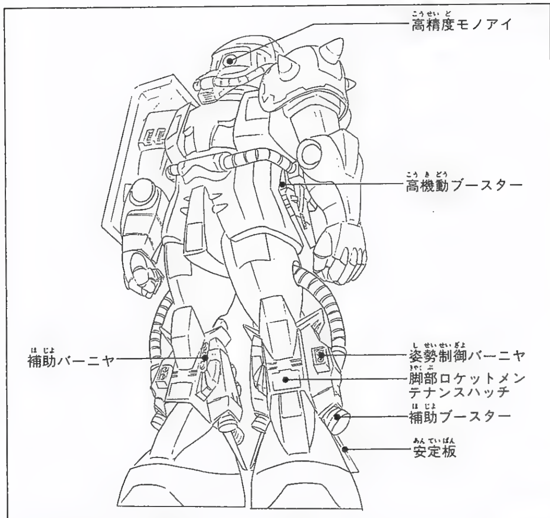
MOBILESUIT TECHNICAL MANUAL

MS-06R-1A

パイロット用

モビルスーツ テクニカル マニュアル

ジオン公国軍
兵器廠作成



MS-06-1A

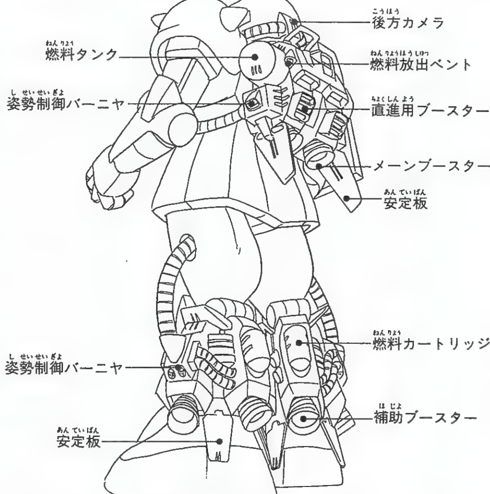
MS—06ザクIIシリーズの最新型であるR—1Aタイプは、これまでのCタイプやFタイプとは根本的にことなったものである。

R—1Aタイプは、推進エンジンとバーニヤが、Fタイプとくらべ、数段強力になっている。燃料の消費量も多くなりがちなので、戦闘中に燃料切れなどということのないように注意すること。

また、腕部と脚部も高出力となっているの



パイロットは，この機体の運用効率を高めるために，各部の名称を十分に知っておかなければならない。

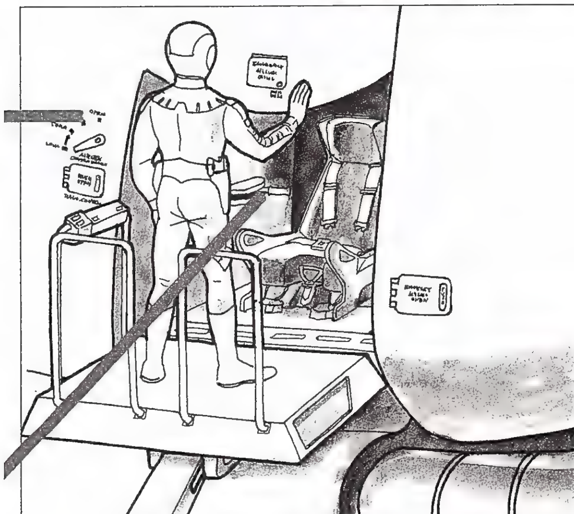


で、白兵戦における有効な活用に期待する。

操作方式は、コンピューターによるセミオートコントロールと、マニュアルコントロールの二種類があり、パイロットは、作戦行動や戦闘状況に応じて、適当な方式を選択することができる。

また、Fタイプにはない機能が多いので、このマニュアルを熟読して、性能を十分発揮できるよう、努力してほしい。

2 コクピット外部

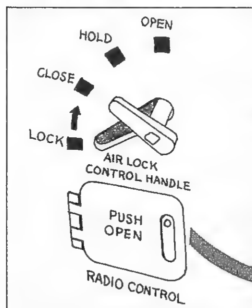


コクピットの周辺には、通常のエアロック開閉スイッチのほか、無線による開閉コントロールスイッチや、緊急時のエアロック開閉装置などが装備されている。これらの装置の点検は、メカマンだけにまかせず、パイロット自身でも点検するように心がけなければならない。

また、エアロックのシーリングは、開閉のたびにチェックしなければならない。



機内への搭乗にあたって，機体外観のチェック，および整備状況の確認をすることは，重要なポイントである。

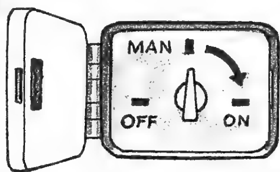


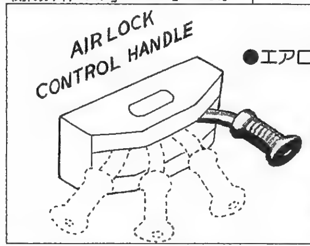
●エアロック外部通常操作ハンドル

ハンドルを操作するときは，ハンドル中央のボタンを押せば，自動的に作動ポジションにセットされる。ハンドルは右回りで，右側から「エアロック気密閉鎖」「エアロック閉」「作動停止」「エアロック開」の順になっており，各ポジションにはクリックがついている。このハンドルは，内部の開閉レバーと連動している。

●無線開閉コントロールスイッチ

エアロックの開閉を無線でコントロールするスイッチで，エアロック開閉以外にも，機体の簡単な操作をおこなうことができる。スイッチは，右側から「無線操作」「開閉操作のみ」「オフ」の順。

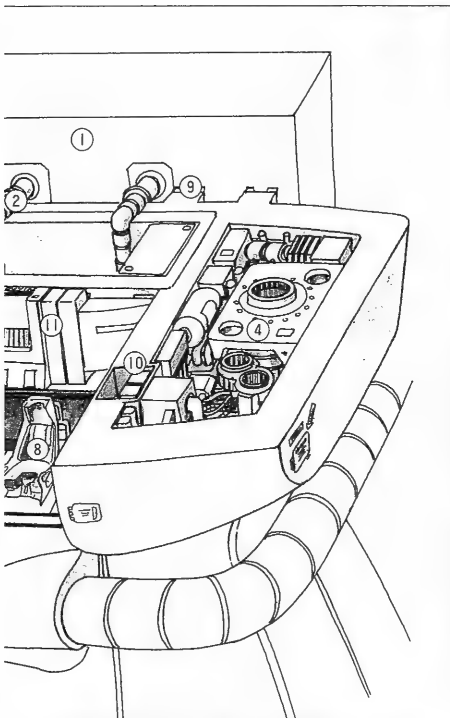




●エアロック内部通常操作ハンドル

機能は外部のハンドルとおなじで，右側から「エアロック気密閉鎖」「エアロック閉」「作動停止」「エアロック開」の順である。外部のハンドルのように，装甲板に収納されるということはない。

3 搭乗方法



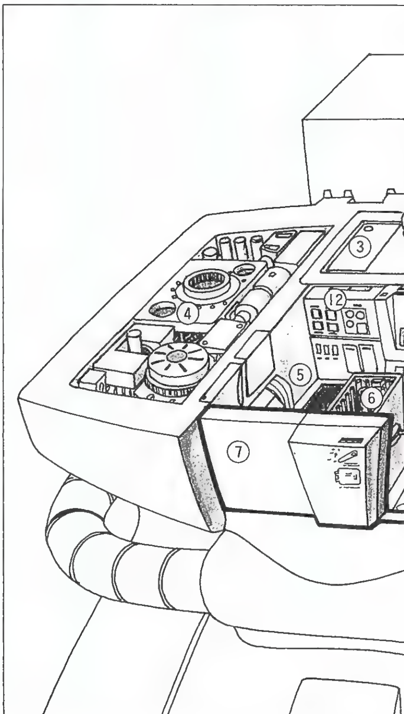
パイロットシートは、パイロットがすわると自動的にコクピットまで移動するようになっている。しかし、シート左下についているシートコントローラーを操作することで、任意のポジションに固定することができる。なお、通路中央部にあるエアロック内部ハッチは、シートの動きに連動して上からおりるようになっている。



搭乗方法は，Fタイプのものとくらべ，多少変更点があるので注意すること。

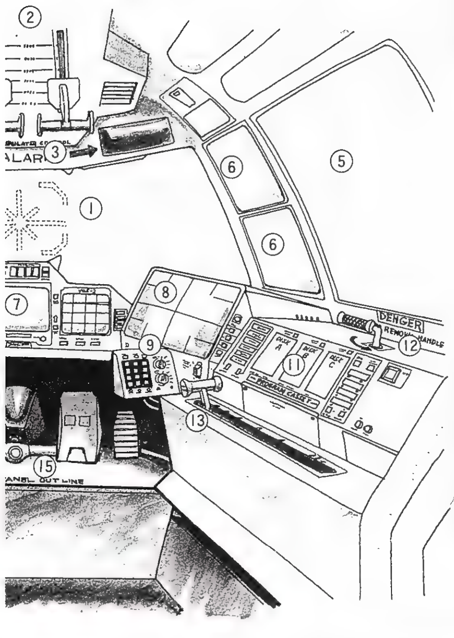
各部名称

①ランドセル
②燃料パイプ
③機内燃料タンク
④肩関節ギアブロック
⑤コクピット
⑥中央配管スペース
⑦胸部装甲分離ライン
⑧イジェクションシート
⑨ランドセル固定ボルト
⑩ロッカー
⑪エアロック機内とびら
⑫サブコントロールパネル（動力系）



4 コクピット内部

本機のコクピットには、マニュアルコントロール用のスイッチが多数装備されているので、それぞれの機能と操作方法を十分に知る必要がある。とくに、各バーニヤの個別コントロールスイッチと、コンピューターへのマニュアルコントロールボードは、機体操作のうえで重要な役割をはたすスイッチ類である。十分に理解すること。

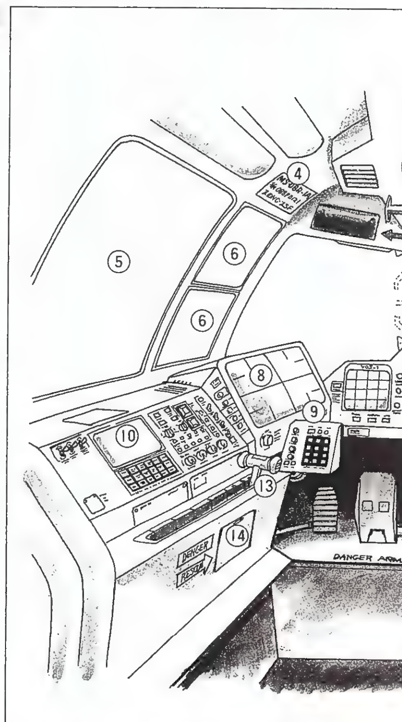




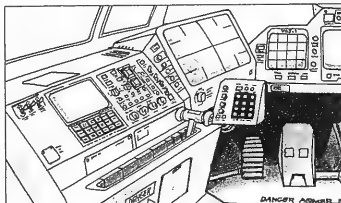
コクピット内部は，本機の機能変更にともなって，大幅な変更がくわえられているので，十分注意されたい。

各部名称

①メーンスクリーン
②手動マニピュレーターコントローラー
③主警報表示スクリーン
④製造プレート
⑤サブスクリーン
⑥戦術データ表示スクリーン
⑦メーンパネル
⑧複合データ表示スクリーン
⑨バーニヤ個別制御スイッチ
⑩コンピューターマニュアル入力ボード
⑪戦術データおよびコンピュータープログラムカセットボード
⑫胸部装甲強制排除レバー
⑬コントロールスティック
⑭非常脱出レバー
⑮フットレバー



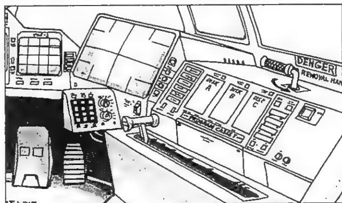
5 メーンパネル



メーンパネル中央の複合表示スクリーンには、通常メーンスクリーンと同様のデータや映像が表示されるが、通信用スクリーンとしても使用できる。左右のスクリーンは、レーダーやセンサー類のデータ表示用で、非常時の機体の損傷状況もここに表示される。メーンスクリーンをふくむすべてのスクリーンの表示内容は、メーンパネルのスイッチにより、切りかえることができる。パイロットは、状況に応じて表示内容を選択する必要がある。

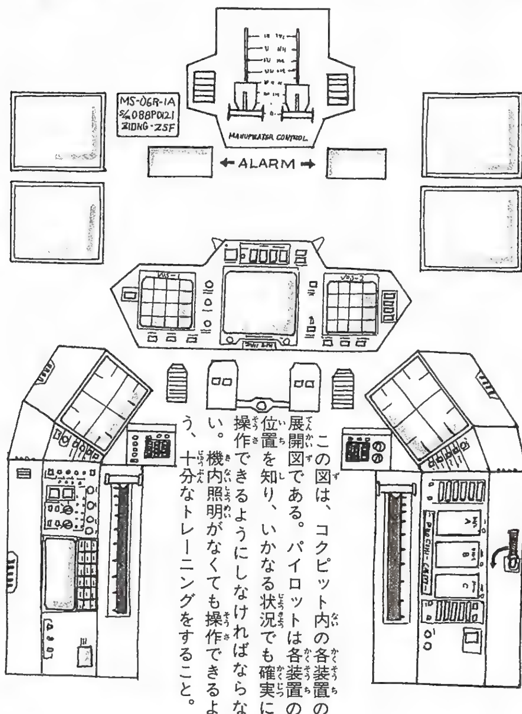
スクリーンコントロールは、スイッチによる手動操作のほかに、コンピューターマニュアル入力ボードによるコントロールも可能である。しかし、ボードは、メーンパネルのスイッチのプリセットに使用して、通常の切りかえ操作に使用することはひかえたい。

本機の電子システムは、Fタイプにくらべてかなり複雑になっているため、自動テスト装置（BIT）が、一定時間ごとに、電子システムをチェックしている。故障や機能不良は、メーンパネル中央のスクリーンに表示されるほか、オーバーヘッドパネルの主警報表示スクリーンにも表示される。なお、この表示は、スクリーンコントロールに関係なくおこなわれる。





メーンパネルには，つねに本機の状態と戦闘データが表示されているが，パネルチェックは迅速におこなうこと。



この図は、コクピット内の各装置の展開図である。パイロットは各装置の位置を知り、いかなる状況でも確実に操作できるようにしなければならない。機内照明がなくても操作できるよう、十分なトレーニングをすること。

6 機体操作方法

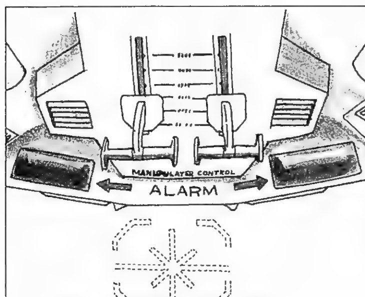
★出撃準備

出撃準備は、まず機体の外部をチェックし、つぎに機内のチェックをおこなう。このときに、武装、燃料搭載量から、機体の整備状態、機内装備品まで、十分に確認しなければならない。とくに各バーニヤや推進エンジンの実効推力、そして各装置の作動状況は重要なチェックポイントである。

また、パイロットは、ノーマルスーツやヘルメットのチェックも入念におこなわなければならない。そして、トラブルを発見した場合は、出撃をひかえるほうがよい。

★発進

母艦からの発進には、主推進エンジンを使用する。主推進エンジンは、三十秒以上の過負荷運転をしてはならない。これは、後続機の発進をおくらせないためと、必要以上の燃料消費をさけるためである。母艦から最終機が発艦したら、三分以内に編隊を組んで戦闘宙域にむけ加速する。発艦から加速までは母艦の指示にしたがい、加速を開始してからはフォーメーションリーダーの指示にしたがう。通信機はつねに受信状態にしておき、指示されないかぎりは、レーザーをふくむ、いかなる手段でも発信をおこなってはならない。



マニピュレーターと歩行システムは，もっとも重要なチェックポイントである。



機体の操作方法は，ここにしるしたものを基本とするが，状況によっては，かならずしもしたがう必要はない。

★攻撃

攻撃は基本的にFタイプとおなじであるが、各バーニヤを手動コントロールできるので、Fタイプよりこまかい機体制御ができる。さらに、攻撃目的によりコンピューターのモードを切りかえられるので、攻撃の効率で、Fタイプを大きく上まわっている。ただし、戦闘に使用できる燃料が、全開噴射で十五分間とかぎられているので、パイロットは、つねに残量計に注意すること。

照準は、メーンスクリーンの中心の物体に、自動的にロックオンする。

★防御

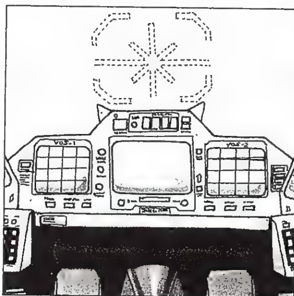
機体の損傷は、戦闘不能、もしくは熱核反応炉がメルトダウンする可能性がないかぎり、自動的にリカバーされる。

もし、主警報がレッドアラームの場合は、機体が爆発する可能性が高いので、すみやかに脱出する必要がある。

また、友軍機からの脱出者を発見した場合は、状況に応じて救出、あるいは司令部に連絡をすること。

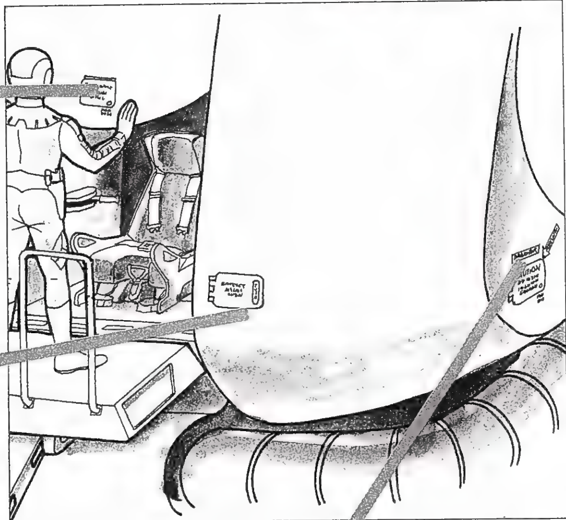
★帰還

戦闘終了および帰還にさいしては、部隊司令官の指示にしたがう。単独行動の場合は、母艦の指示にしたがう。帰還航行は、特別な場合をのぞいて、コンピューターのオートパイロットを使用する。



射撃は，スクリーン中央のゲージにサインがでてからおこなう。

7 緊急脱出装置



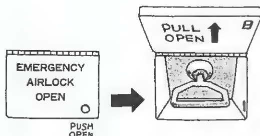
モビルスーツの脱出装置は、このR－IAタイプから装備されたもので、機体のシリアルナンバーにより多少の差はあるが、基本的にはどの機もおなじものである。

脱出装置には、機内で操作するものと、機外で操作するものがある。それぞれ操作方法がちがうので、各装置の操作手順をすべて知っておく必要がある。また、どの位置にあるのかも、よくおぼえておくこと。



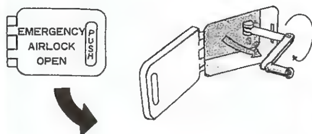
緊急脱出装置は，本機からモビルスーツに装備されたもので，操作方法が特殊なので注意されたい。

①緊急エアロック開放レバー



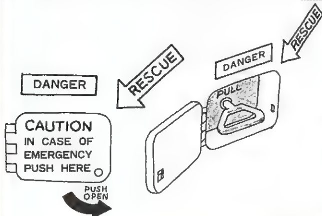
機体外部、エアロックの上部にある。ケース内のケーブルをひけば、エアロックは自動的に開放される。

②緊急エアロック手動開放レバー



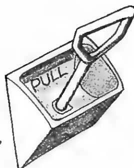
機体外部、エアロックの右側にある。内部のハンドルを右にまわすことにより、エアロックは開放される。

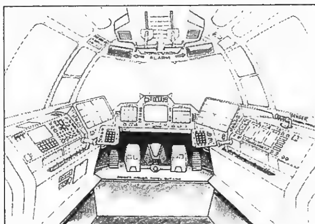
③強制脱出スイッチ



機体の左わき下部にあるスイッチで、イジェクションシートを外部から始動させることができる。







■補助脱出ハンドル

脱出装置の操作には、優先順位があるので注意すること。順位は「イジェクションシートの脱出リング」「コンソール左



■強制胸部装甲排除レバー

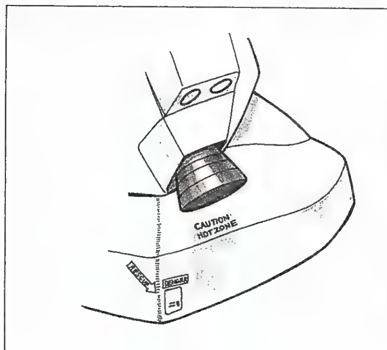
下の補助脱出ハンドル」「コンソール右上の強制胸部装甲排除レバー」の順である。機体内部の脱出装置は、この三つ以外には装備されていないので、これらの装置が作動しない場合はエアロックから脱出する。このとき、エアロックのまえにサバイバルキットが収納されているので、かならず携帯すること。

エアロックから脱出したあとは、戦闘にまきこまれないために、すみやかに戦闘宙域から脱出すること。自分のいる宙域の戦闘が、白兵戦の場合は半径十五キロメートル以上、対艦戦闘の場合は五十キロメートル以上はなれることが賢明である。

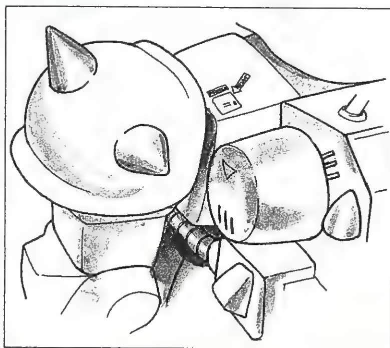
脱出の手順や脱出後の行動は、「脱出パターン」をよく読み、これを順守すること。



緊急脱出装置は，コクピット内外のほかにも，左肩上部と左脚部内側に装備してある。注意して使用すること。

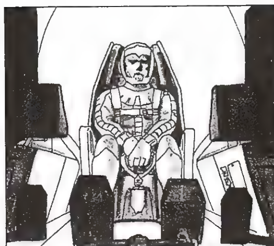


左図は、左脚部の内側にある緊急脱出ハンドルである。この装置は、胸部の強制脱出スイッチとおなじはたらきをもつ。補助推進ノズルのホットゾーン近くにあるため、操作にさいしては、周辺の熱に十分注意をはらう必要がある。



右図は、左肩上部にある強制脱出スイッチである。これも、胸部の強制脱出スイッチとおなじものである。無重力状態で作動させるため、胸部装甲が開放されるとき、はねとばされないよう、身近にある作業用ステップなどにからだを固定すること。

8 脱出パターン



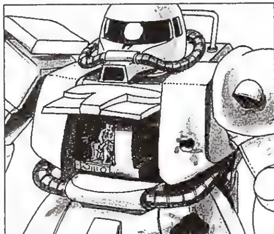
①脱出操作開始

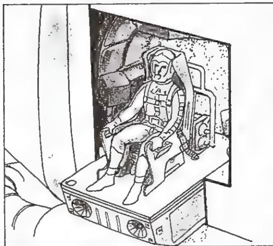
シート中央にある脱出リングをひくことで，脱出装置が作動する。この操作で作動しないときは，補助脱出ハンドルを操作する。これで装置が作動しない場合には，胸部装甲を強制排除して，再度リングをひく。全操作をおこなっても脱出装置が作動しないときには，エアロックから脱出する。

②強制装甲排除

脱出装置が作動すると，まず胸部装甲板がはねあがるように排除される。これによりコクピット内は真空になるので，かならずノーマルスーツを着用しておくこと。スーツは脱出操作まえに気密テストをおこなっておくこと。

なお，装甲排除と同時に，パイロットはシートに固定される。



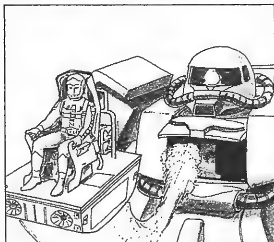


③シート射出

脱出リングがひかれてから0.25秒後に，イジェクションシートが機体から射出される。このときの最大加速度は16Gで，シートのブースターは最長30秒間作動をつづける。射出5秒後には機体から1キロメートルはなれているので，搭乗機の爆発にまきこまれる心配はほとんどない。



本機からの脱出は，ここにしめしたパターンで，全自動でおこなわれるため，特別な操作の必要はない。

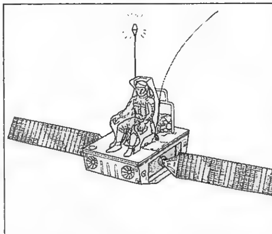


④ブースター点火

機体からの射出は，リニアモーターでおこなわれる。

機体からはなれると同時に，離脱用のブースターに点火される。ブースターの点火は自動的におこなわれるが，もし点火されない場合には，シートの左側にあるコントロールスイッチで点火する。

⑤脱出完了



戦闘宙域から離脱したら，リバースロケットに点火して，友軍の作戦行動半径からはなれすぎないようにする。バーニヤで，シートが太陽に正対するように姿勢を制御する。太陽電池パネル，アンテナ，シグナルポールを展開する。以上が完了したら，サバイバルマニュアルにしたがって救助をまつ。

●脱出上の注意

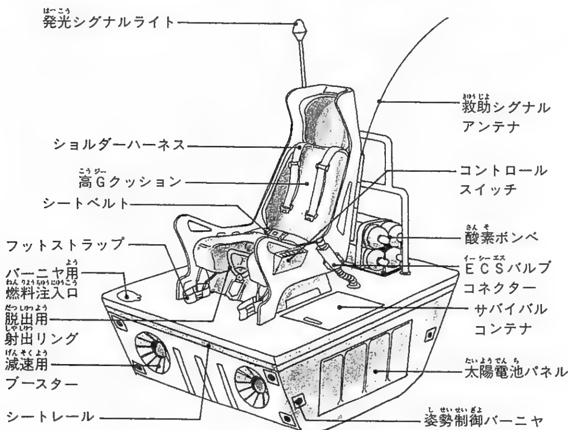
注意すべきことは、タイミングをはずさないことと、友軍機に脱出のコールをかならずおくることである。

戦闘終了後、生存者の救出がはじまる。救出活動は、南極条約によりまもられており、敵からの攻撃はない。また、敵の救助活動に対する妨害も、いっさいしてはならない。この場合、上官の命令よりも南極条約が優先される。

救助をもとめる者に対しては、敵味方をとわず、これを救出する努力をすること。

敵軍に救助され捕虜となった場合は、各所属部隊で事前に指示されている行動をとること。

9 パイロットシート

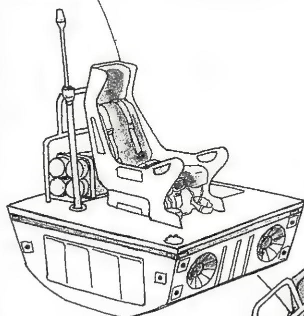


このパイロットシートは、緊急時のイジェクションシートとしても機能する。これは、MS－06シリーズで本機がはじめて搭載したものである。そのため、整備・運用面には細心の注意が必要である。

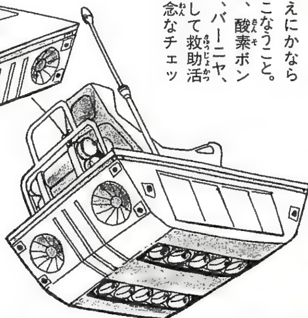
整備面では、脱出用ブースターと緊急用生命維持装置をとくに入念に整備すること。生命維持装置の寿命、作動開始から最大百二十時間という値は、つねに保証されていなくてはならない。



R—1Aタイプのパイロットシートは，脱出用イジェクションシートをかねている。

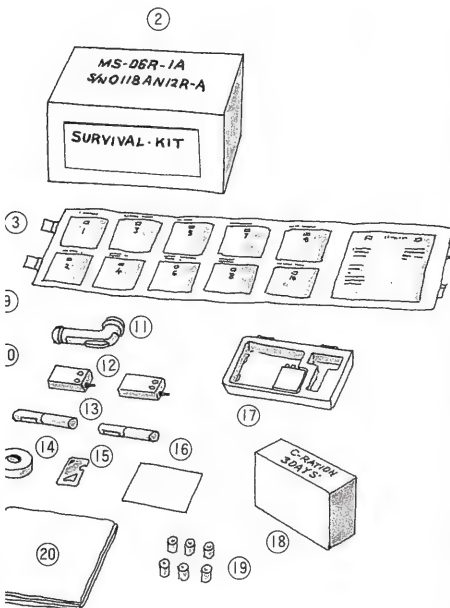


パイロットは、出撃まえにかならずシートチェックをおこなうこと。内容は、生命維持装置、酸素ボンベ、射出用ブースター、バーニヤ、サバイバルキット、そして救助活動に必要な各装置の入念なチェックである。



脱出装置以外の機能は、Fタイプとほぼおなじである。ちがう点は、Fタイプではノーマルスーツへの ECS(生命維持)コネクターが機体側にあったのに対して、シート側にかわっている点。そして、シートの左側にコントロールスイッチがついた点である。このスイッチは、射出用ブースター、バーニヤ、緊急用生命維持装置をマニュアルコントロールするものである。

10 サバイバルキット



サバイバルキットの内容は、全二十四種類、五十一品目をかぞえる。各使用方法は、サバイバルマニュアルに記載されている。各物資の保証期間は、食料、医薬品、

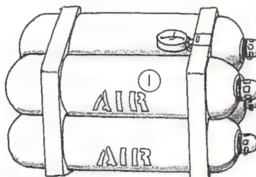
バッテリーが六か月、その他は一年間が最低保証期間となっている。酸素ボンベは、一年ごとに耐圧テスト、保温テストの実施が義務づけられている。

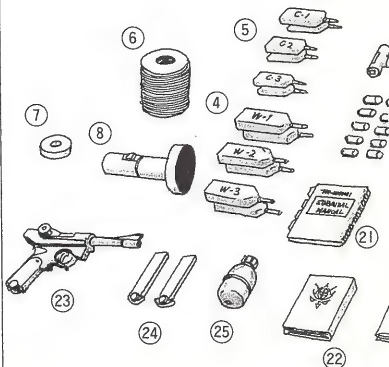


サバイバルキットの内容は以下のとおりである。定期的に，パイロット自身が内容物のチェックをすること。

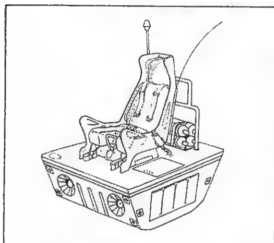
リ　ス　ト

①酸素ボンベ（5日分）②コンテナ本体　③収納ポケットつきシート　④蒸留水（3日分）⑤食料（3日分）⑥ワイヤーケーブル　⑦両面テープ　⑧マグネットガン　⑨注射器　⑩医薬品（10種類）⑪フラッシュライト　⑫シグナル送信機（2個）　⑬ストロボライト（2個）　⑭気密補修テープ　⑮万能ツール　⑯反射板　⑰メディカルトレー　⑱食料コンテナ　⑲バッテリー（6個）　⑳断熱保温シート　㉑サバイバルマニュアル　㉒ジオン読本　㉓ピストル　㉔予備マガジン（2個）　㉕手榴弾（1個）





11 サバイバルキットの使用法

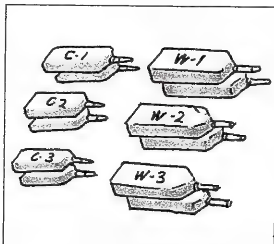


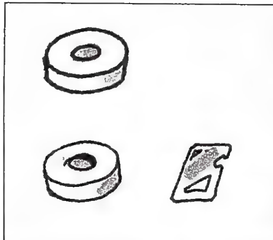
●生命維持装置

生命維持装置は，シートに内蔵されたバッテリーと，太陽電池の電力で作動する。そのため，シートが惑星などの陰にはいらないように注意する。酸素はシート後部のボンベより供給され，排泄物は宇宙空間に放出される。

●食料・薬品

食料と飲料水は，ポリケースに無菌パックされており，ヘルメットのコネクターに接続して摂取できる。薬品には，ノーマルスーツのメディカルコネクターを使用する。ともに，最低３日間の生命維持に必要な量がセットされているが，節約して使うよう心がけたい。





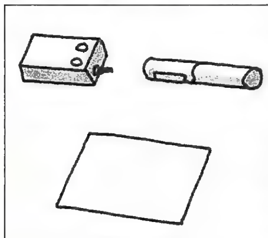
●工具

工具としては，補修用気密テープ，両面接着テープ，万能ツールの３点がセットされている。これらは，おもにノーマルスーツの補修と，備品の固定に使用する。

なお，気密テープはヘルメットにも使用できる万能タイプで，強度の高い透明テープである。



サバイバルキットは，コンパクトにまとめられている。使用法を熟知することで，生還の可能性も大となる。

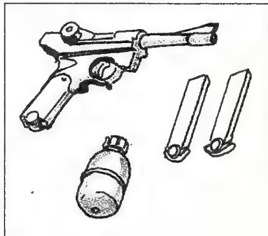


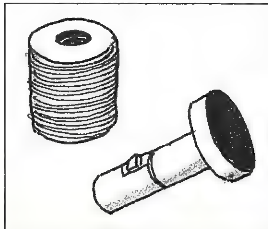
●通信機・信号銃

シート内蔵の通信機が使用不能の場合に使用する。機能はシート内蔵のものとおなじで，各2個ずつセットされている。通信機はバッテリーの交換で，最長72時間の連続使用が可能である。全通信装置が使用不能の場合は，反射板で，近くの友軍機に救助信号をおくることができる。

●携帯武器

サバイバルキットには，護身用の携帯武器がセットされている。内容は，オートマチックピストル1丁と予備マガジン2個，それに手榴弾1個である。宇宙空間でのピストル射撃には，高度の技術が必要である。宇宙空間での射撃感覚を知るために，射撃訓練を経験しておくこと。



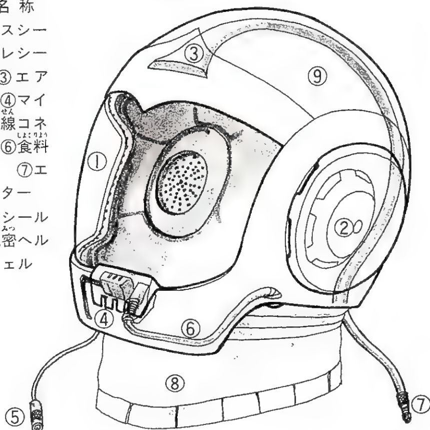


●救助用具

救助用具は，友軍のモビルスーツなどに母艦まで曳航してもらうときに使用する。ワイヤーロープは15メートル巻きで，マグネットガンは質量200キログラムまでの牽引にたえられる。使用法は，ロープをマグネットガンに接続して，モビルスーツなどの装甲板にむけて射出する。

12 スーツ&ヘルメット

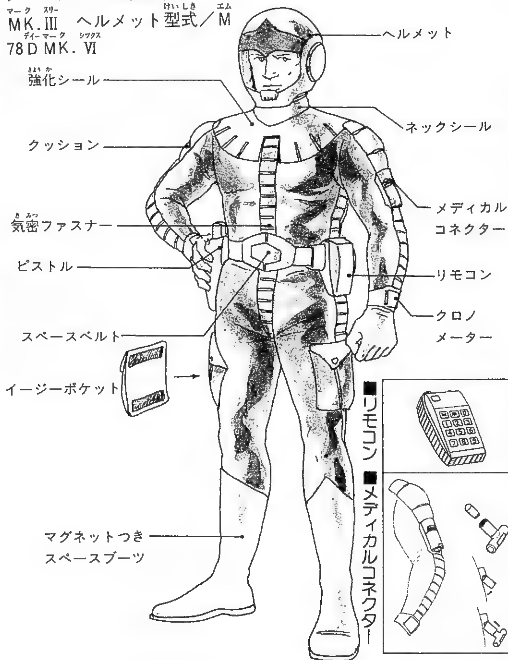
各部名称
①フェースシールド ②レシーバー ③エアダクト ④マイク ⑤無線コネクター ⑥食料チューブ ⑦エアコネクター ⑧ネックシール ⑨強化気密ヘルメットシェル



R－IAタイプ専用のヘルメットとノーマルスーツは、これまでのものの機能にくわえ、サバイバルキットとの接続が可能になっている。食料と水は、ヘルメット左下のコネクターに接続し、薬品は注射器に薬品カートリッジをセットして、スーツのメディカルコネクターに接続する。これらのコネクターには、気密バルブがついており、スーツ内の空気がもれる心配はまったくない。



R—1Aタイプには，専用のノーマルスーツとヘルメットを使用しなければならない。



構成/小田雅弘・石川秀一
メカニカルデザイン/大河原邦男
イラスト/大河原邦男・増尾隆幸・上田信・米田仁志・上段誠
プラモ製作/小田雅弘・高橋昌也・川口克己・下田一・大河原邦男
レイアウト/藤森尚隆
写真/石川流星（本社写真部）
協力/（株）バンダイ

復刻版装丁協力/エイティ

講談社コミックスKCDX　第2175号
ⓒ創通エージェンシー・サンライズ
〈復刻版〉
機動戦士ガンダム
モビルスーツバリエーション❶
ザ ク 編

2006年7月26日　第1刷発行

定価はカバーに
表示してあります。

発行者　五十嵐隆夫
発行所　株式会社講談社
〒112-8001東京都文京区音羽2-12-21
☎　編集部　東京（03）5395-3457
販売部　東京（03）5395-3608
印刷所　共同印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社
Printed in Japan　N.D.C.726　193p　15cm

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部（電話03-5395-3603）あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせはコミックボンボン編集部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



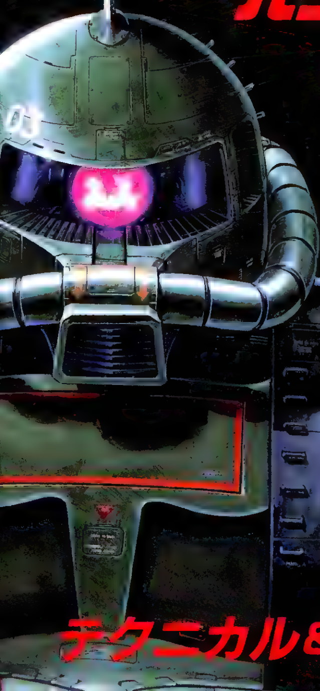
ISBN4-06-372175-2

機動戦士ガンダム

《復刻版》

MSV モビルスーツバリエーション

1 ザク編





テクニカル&ヒストリー

機動戦士ガンダム 《復刻版》

MSV モビルスーツバリエーション

1 [illegible]編

テクニカル&ヒストリー

《復刻版刊行に寄せて》

本書は1984年講談社ポケット百科シリーズとして、MSVを中心とした当時のガンダム研究の成果を3分冊で集大成した『機動戦士ガンダムモビルスーツバリエーション』の完全復刻版です。第1次MSVムーブメントの全貌を語る貴重な原典資料として、ファンの皆様のお役に立てれば幸甚です。

復刻再刊に際し、印刷原版がすでに処分されていたため、やむをえず原本からの複写とさせていただきました。表記についても明らかな誤記、誤植以外は手を加えておりませんので、現在公式とされている設定やデータとは一部相違点があることをあらかじめおことわりさせていただきます。




573



9784063721751



1929979008000

雑誌 46295-75

ISBN4-06-372175-2

C9979 ¥800E (0)

講談社

定価:本体800円（税別）



黒い三連星機から、サイコミュシステム搭載機まで、ジオン軍の主力モビルスーツ〝ザク〟のすべてが、この一冊につめこまれた！

©創通エージェンシー・サンライズ　カバーイラスト／上田　信



KCDX

機動戦士ガンダム

モビルスーツバリエーション

1 復刻版

ザク編



講談社

KCDX

機動戦士ガンダム

モビルスーツバリエーション

復刻版

1

ザク編

講談社